

ダイジェスト版

幼児期から中学3年生の 家庭教育調査

縦
断
調
査

年少児から中学3年生までの縦断調査データをもとに
幼児期から中学生の家庭における
「子どもの学びと親のかかわり」を考える

CONTENTS

- 2 本調査について、調査概要
- 4 基本属性
- 6 調査の枠組み
- 8 第1章 年少児～小学1年の育ち
- 14 第2章 小学2年～小学5年の育ち
- 18 第3章 小学6年～中学3年の育ち
- 22 第4章 全体を通して
- 26 調査から読み取れること

ベネッセ教育総合研究所

<https://benesse.jp/berd/>

2025年3月

本調査について

●本調査について

経済のグローバル化やITによる情報化など、社会環境の変化が加速する中で、環境に柔軟に対応し、学び続け、課題を解決する姿勢や力が必要になっている。また、幼児期において、そのような姿勢や力を身に付けることの重要性が高まっている。

本調査は、幼児期から中学生までの子どもの発達と保護者のかかわりとの関連性について明らかにする目的で実施した。2012年に年少児だった子どもを中学3年まで継続して追跡することで、子どもの成長・発達プロセスと保護者の子育ての変化を捉えている。

●本調査の特徴

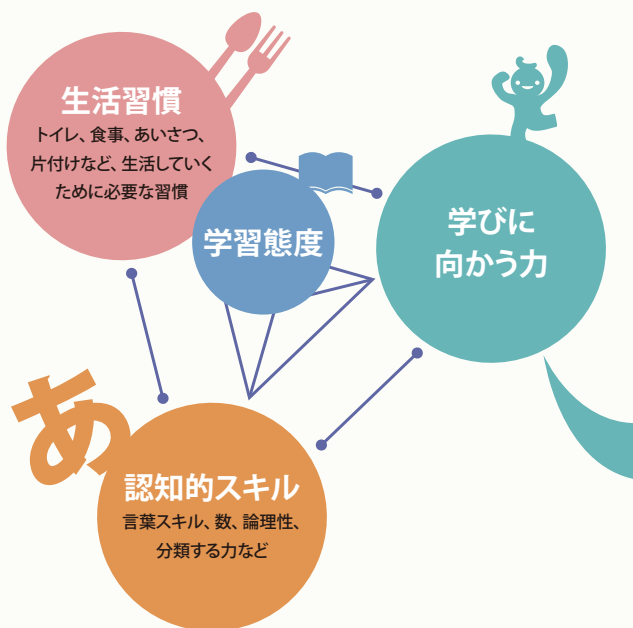
1. 子どもの生活や発達、保護者の子育ての様子を捉えることができる

本調査は、年少児から中学3年までの12年間を通して、可能な限り同じ項目を設定して調査を行った。そのため、子どもの成長・発達と家庭での保護者のかかわりの変化を捉えている。

2. 子どもの成長・発達プロセスと保護者のかかわりとの関連性を見ることができる

本調査では、幼児期をベースに小学校以降の学びにスムーズに適応するために必要とされる力、生涯にわたって求められる力について検討し、学びに向かう力、認知的スキル、生活習慣・学習態度を軸に置いて、子どもの成長・発達プロセスと保護者のかかわりとの関連性を分析している。

※ この調査の回答者は保護者（母親）であり、保護者から見た発達の変化を捉えている



好奇心

- ・新しいことに好奇心を持てる
- ・好きなことに集中して遊べる
- ・工夫して遊べる
- ・わからないことについて「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる

協調性

- ・遊びなどで友だちと協力することができる
- ・人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる
- ・遊ぶとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる
- ・友だちとけんかをして、あやまるなどして仲直りができる

自己主張

- ・自分が何をしたいのかを言う
- ・ほしいもの、してほしいことを大人に頼める
- ・困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる
- ・友だちからいやなことをされたら、「いや」「やめて」などといえる
- ・友だちと意見が違って、自分の意見を主張することができる

自己抑制

- ・人の話が終わるまで静かに聞ける
- ・ルールを守りながら遊べる
- ・遊びなどで順番が回ってくるまで待てる
- ・夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる
- ・遊びを中断されても、時間をおいて続けられる
- ・自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる

がんばる力

- ・物事をあきらめずに挑戦することができる
- ・どんなことに対しても、自信を持って取り組める
- ・自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとすることができる
- ・一度始めたことは最後までやり通せる

※ ここに挙げた項目は、学びに向かう力の一部の項目である。また、年齢に合わせて項目内容を変更している（項目はベネッセ教育総合研究所サイトに2025年6月以降に掲載予定）

調査概要

方 法 ● 郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）

対 象 ● 2012年に年少児（3～4歳児）の子どもを持つ母親 ※子ども：小学4年・5年・中学1年・3年に実施（インターネット調査）

地 域 ● 全国

時 期 ● 2012年から毎年2～3月に実施 ※中学3年のみ8月実施

調査年	子どもの学年・年齢	発送数	回収数	回収率	分析対象数
2012	年少児（3～4歳）	2,400	2,277	94.9%	1,905
2013	年中児（4～5歳）	1,905	1,585	83.2%	1,460
2014	年長児（5～6歳）	1,203	1,077	89.5%	1,074
2015	小学1年（6～7歳）	622	552	88.7%	544
2016	小学2年（7～8歳）	544	483	88.8%	479
2017	小学3年（8～9歳）	479	445	92.9%	444
2018	小学4年（9～10歳）	444	405	91.2%	402
2019	小学5年（10～11歳）	402	385	95.8%	385
2020	小学6年（11～12歳）	398	351	88.2%	340
2021	中学1年（12～13歳）	398	347	87.2%	307
2022	中学3年（14～15歳）	398	291	73.1%	278

※ このダイジェスト版では、同じ子どもの発達や生活の変化を捉えるため、年少児以降の縦断調査に同意し、調査を中断することなく回答した保護者のデータを分析した
子どものデータは中学1年・3年のみを使用した

※ 子ども対象の回収数：小学4年 206、小学5年 220、中学1年 223、中学3年 203

※ 調査対象者は、子どもの年齢（6か月区分）・性別をもとに均等割り付けに応じてランダム抽出した

※ 年少児は3歳児クラス、年中児は4歳児クラス、年長児は5歳児クラスに通う年齢の子どもを表している

※ 2020・2021・2022年は、2019年調査対象者へ発送している（一部除外）

※ 図表で使用している百分率（％）は、小数点第2位を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある

※ 年長児から小学1年にかけて分析対象数が減少しているが、属性の偏りや変数に変化がないことを確認している

●主な調査項目

子どもの生活・発達・学び：

起床・就寝時刻、就園・就学状況、メディア利用時間・内容・目的・使い方、
認知的スキル、学びに向かう力、生活習慣、学習態度、読書、習い事、通塾、気質など

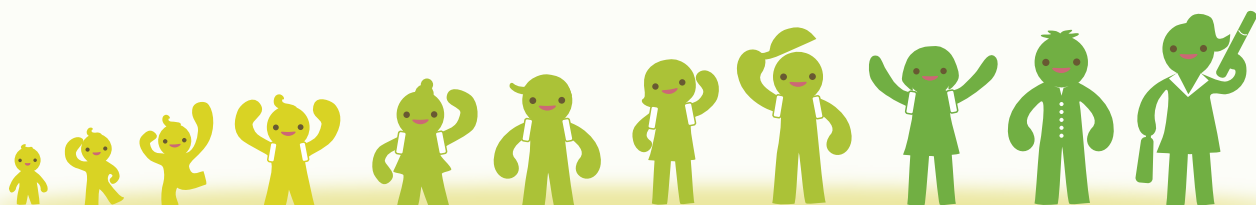
親の子育て・養育態度や生活：

養育態度・養育行動、子育て肯定感・否定感、子育て観・教育観、生活満足度、
子どもと過ごす時間、読み聞かせ、園・学校とのかかわりなど

基本属性：

子どもの性別、きょうだい数、出生順位、回答者の属性（年齢、学歴、
就業形態・日数・時間、帰宅時間）、世帯年収など

※ 調査票は、ベネッセ教育総合研究所のサイトに掲載予定（2025年6月以降）

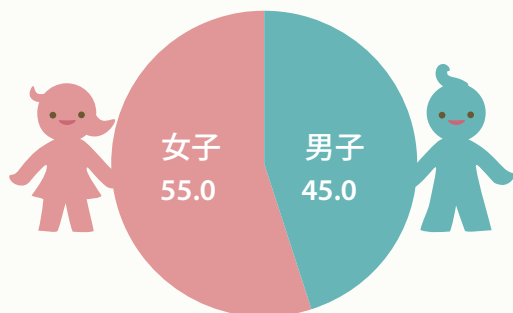


基本属性

※ 基本属性は、子どもが年少児から中学3年になるまで継続して調査に参加した保護者(母親・278名)の回答

子どもの性別

(%)



子どもの誕生月

(%)



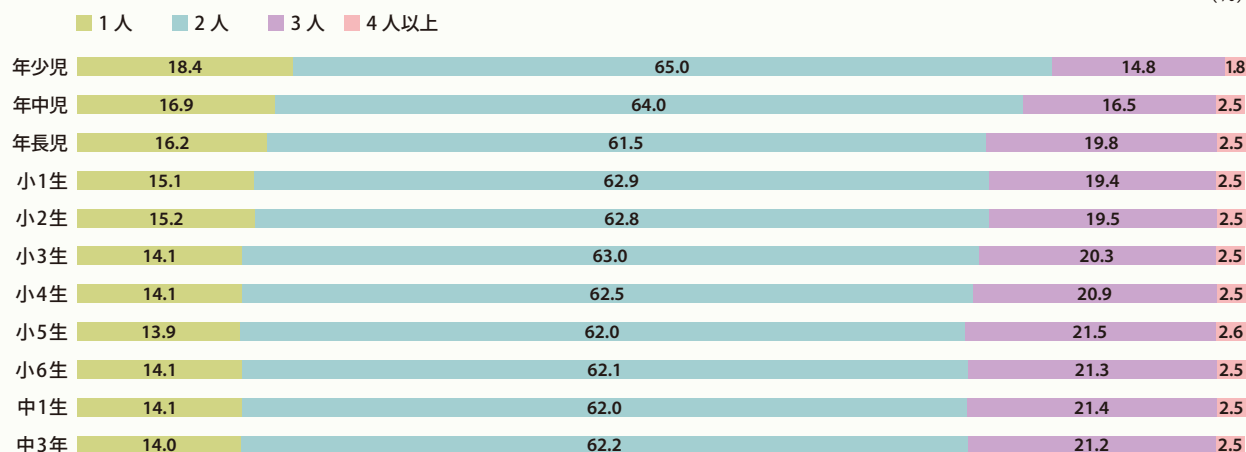
子どもの出生順位

(%)



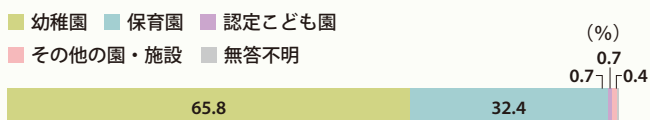
子どものきょうだい数

(%)

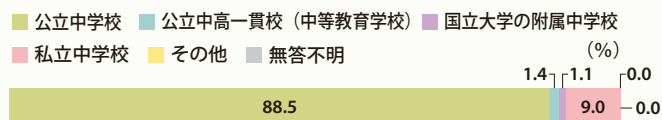


※ 対象となる子どもも含めた人数

就園状況 (年長児)



中学校の状況 (中学3年)



子どもと同居している家族

(%)

	年少児	小1生	中1生
父親	98.2	96.8	92.4
母親	100.0	100.0	100.0
きょうだい	78.4	84.2	82.7
父方の祖父母	21.6	18.7	15.5
母方の祖父母	11.5	9.7	10.8
その他	6.5	2.6	0.7

※ 子どもと同居している母親を回答者としているため、母親は100.0%

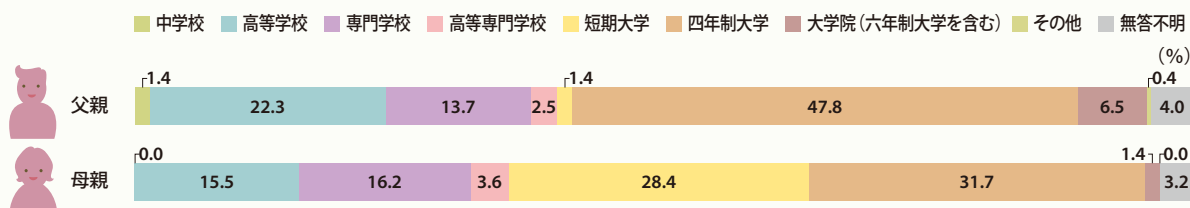
保護者の平均年齢



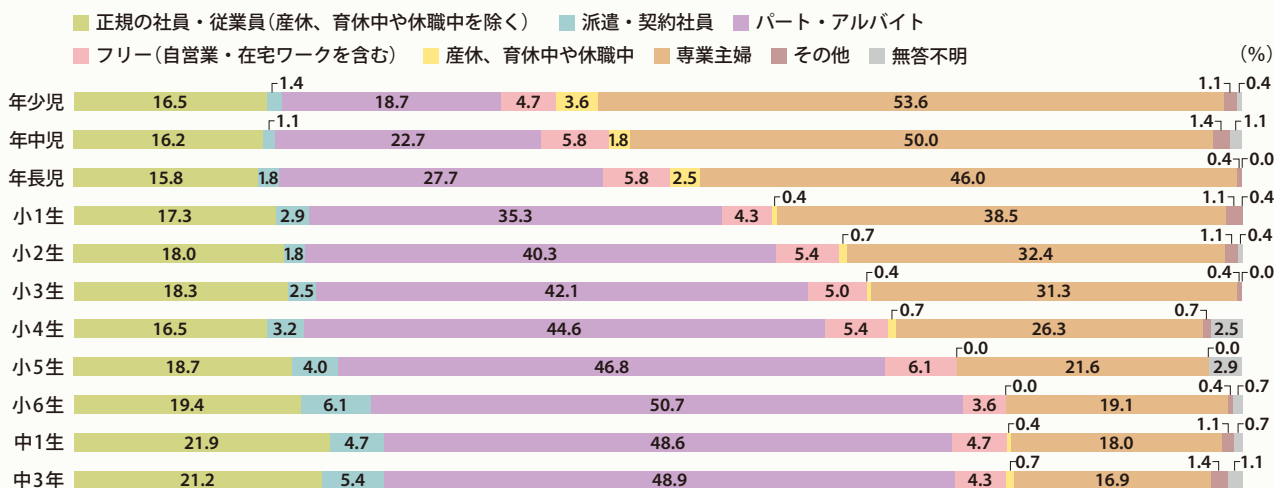
		(歳)							
		年少児	年中児	年長児	小1生	小2生	小3生	小4生	小5生
父親		38.4	39.4	40.4	41.3	42.2	43.2	44.2	45.3
母親		36.8	37.9	38.8	39.9	40.9	41.8	42.9	43.9

※小学6年以降は調査していない

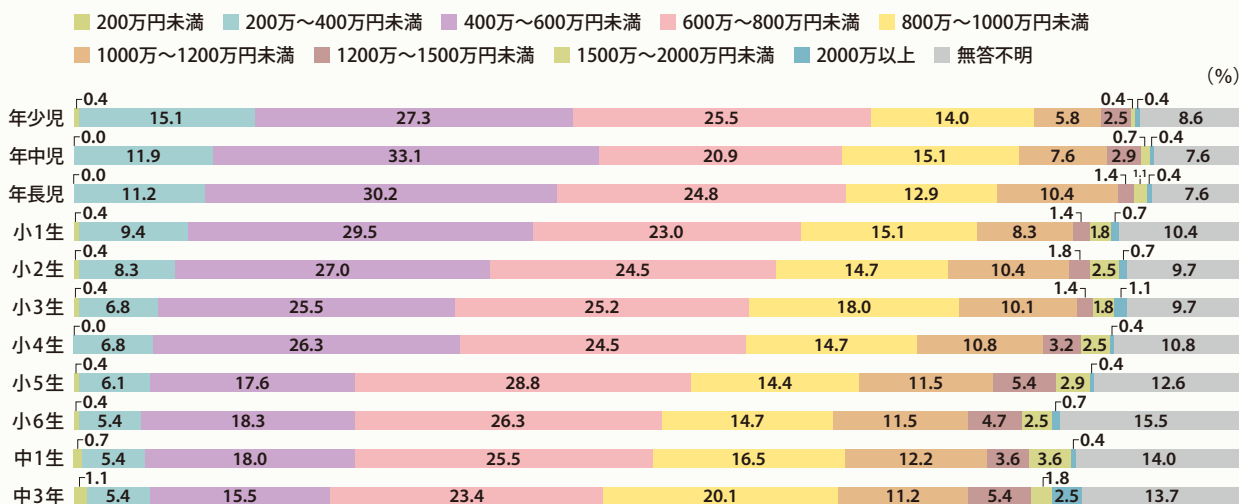
保護者の最終学歴



保護者(母親)の就業状況



世帯年収

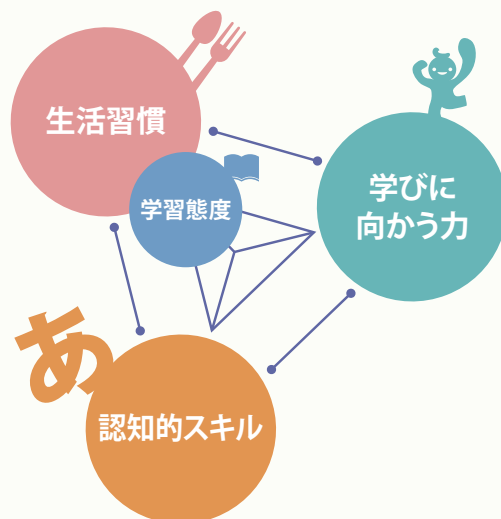


調査の枠組み

●分析で注目した子どもの発達

この調査では、幼児期から中学生までの学びのプロセスを把握するために、3つの軸：《生活習慣・学習態度》《学びに向かう力》《認知的スキル》を設定した。生活や学びの基盤としての《生活習慣》や《学習態度》、情動的な側面としての《学びに向かう力》、そして認知的な側面としての《認知的スキル》である。幼児期から小学校入学の時期にかけては、学校生活に移行し適応するために必要な力として、小学生以上では、自ら学び続け、課題を解決するために必要な力としてこの3つの軸を置いている。

3つの軸	幼児期	小学生以上
生活習慣・学習態度	生活習慣	学習態度
学びに向かう力	好奇心 自己主張 協調性 自己抑制 がんばる力	
認知的スキル	言葉スキル 数 論理性 分類する力	言葉スキル 数 論理性



●子どもが育つ環境としての保護者

本調査では、子どもが育つ環境としての保護者に注目し、子どもが幼児から中学生になるまでの保護者のかかわりがどのように変わっていくのかを追跡している。

幼児期から中学生までの保護者のかかわりとして、「養育態度」「働きかけ」の調査項目について因子分析を行い以下のように設定した。

かかわり	内容	項目の代表例
養育態度	意欲の尊重	「子どもがやりたいことを尊重し、支援している」など。
働きかけ	思考の促し	「子どもの質問に対して、自分で考えられるように促している」など。
	知的関与 ※ 小学2年以降	「身近なことに関連付けて考えさせる」など。
	統制的関与 ※ 小学2年以降	「子どもが勉強の計画を立てるのを手伝う」 など。

※ 本調査では、母親の回答を対象に分析している

※ 発達に合わせて、幼児期と小学生、中学生で項目内容と項目数は若干異なる
詳細な項目については、8ページ以降の各年齢区分の分析を参照

※ 因子分析の結果は、ベネッセ教育総合研究所のサイトに掲載予定(2025年6月以降)

●子どもの発達に保護者のかかわりはどう影響するか

- ・ 幼児期の読み聞かせは小学校以降の子どもの読書行動や語彙力にどうつながるのか？ (➡23ページへ)
- ・ 子どもの発達に、同時期に作用する保護者のかかわりは何か？ (➡24ページへ)
- ・ 小学生の子どもの発達に関連する幼児期の保護者のかかわりは何か？ (➡25ページへ)

調査結果ハイライト



第1章 年少児～小学1年の育ち

➡ 8～13 ページ


年少児から小学1年にかけて、「協調性」「自己抑制」「がんばる力」はゆるやかに発達して得点が伸び、「言葉スキル」「数」は急速に成長する。年少児の《生活習慣》が年中児の「協調性」に関連し、年長児の「言葉スキル」の成長を促す。幼児期における《生活習慣》《学びに向かう力》《認知的スキル》の成長が小学1年の《学習態度》を支える。また、保護者が子どもの意欲を尊重したり、思考を促すことが、幼児期の《学びに向かう力》《認知的スキル》の得点の伸びに関連する。



第2章 小学2年～小学5年の育ち

➡ 14～17 ページ

小学2年から小学5年にかけて「好奇心」と「自己主張」の伸びが減り、「言葉スキル」と「論理性」も小学3年から小学4年に低減する。保護者による「意欲の尊重」はゆるやかに増加し、「統制的関与」は低減することから、子どもの自立を見守る様子がうかがえる。保護者の「知的関与」を高群と低群別に比較すると、高群のほうが子どもの《学びに向かう力》《認知的スキル》が高い傾向がみられる。



第3章 小学6年～中学3年の育ち

➡ 18～21 ページ

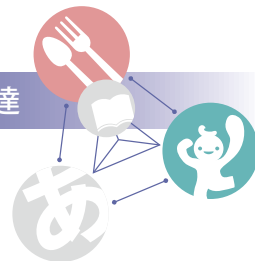
小学6年から中学3年にかけて、「好奇心」「協調性」「がんばる力」はやや低減する。保護者による「知的関与」はやや低減するが、「意欲の尊重」は得点が伸びる。子どもの成長とともに直接的な手助けが減り、必要に応じたかわりに親子の関係性が変化していることがうかがえる。

第4章 全体を通して

➡ 22～25 ページ

保護者による「意欲の尊重」「思考の促し」は、幼児期から小学低学年での子どもの《学びに向かう力》や《生活習慣》《学習態度》の伸びを促す。幼児期の読み聞かせ頻度が小学校の時期の子ども自身によるひとり読みに関連し、中学3年の語彙得点に関連する。

「協調性」「自己抑制」「がんばる力」は、ゆるやかに成長する



第1章では、年少児から小学1年を通して回答した544名について分析している（保護者回答）。

年少児から小学1年にかけての《学びに向かう力》として、「好奇心」「自己主張」「協調性」

「自己抑制」「がんばる力」と《生活習慣》について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を示した。

Q 現在、お子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図 1-1-1 好奇心

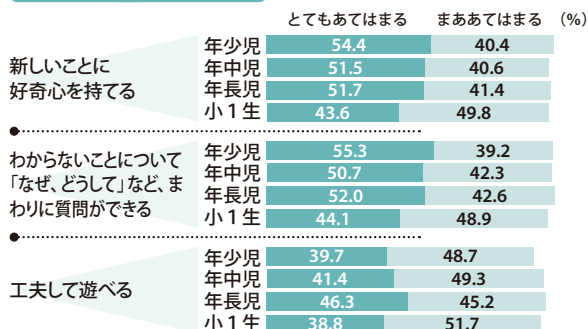


図 1-1-2 自己主張

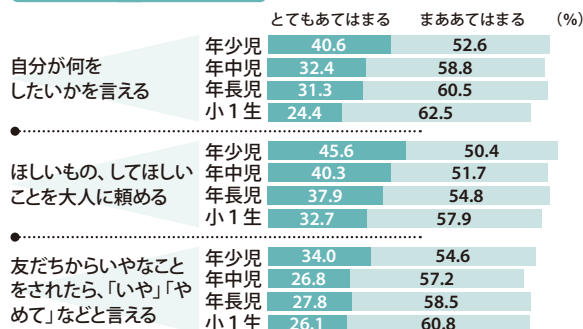


図 1-1-3 協調性

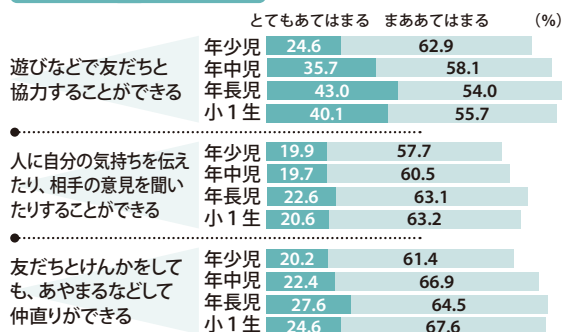


図 1-1-4 自己抑制

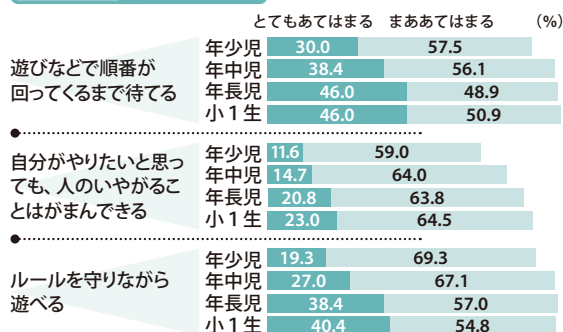


図 1-1-5 がんばる力

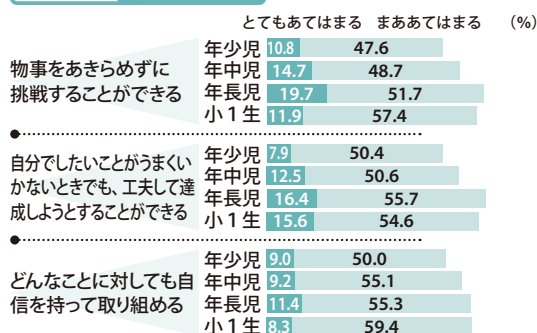


図 1-1-6 生活習慣



解説

- 「好奇心」は年少児から高く、「協調性」「自己抑制」「がんばる力」は年少児から年長児にかけてゆるやかに「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が高くなるが、年長児から小学1年にかけて低くなる項目がみられる。例えば「新しいことに好奇心を持てる」では、「とてもあてはまる」の比率が年長児では51.7%だったが、小学1年では43.6%だった（図1-1-1）。「自己主張」は、年少児の「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率がもっとも高く、年齢が上がるとともに徐々に低くなる（図1-1-2）。
- 《生活習慣》は、「脱いだ服を自分でたためる」「好き嫌がなく食事ができる」など年齢が上がるにつれて「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が高まる項目がある一方で、「家で遊んだ後、片付けができる」などの年齢による変化がほとんどみられない項目もある（図1-1-6）。

年少児～小学1年の《認知的スキル》の発達

文字・数の力は大きく成長

年少児から小学1年の《認知的スキル》はどのように変化しただろうか。

「言葉スキル」「数」「論理性」「分類する力」の4領域をみたものが図1-2-1～4である。

合わせて、小学1年の《学習態度》もみている。

Q 現在、お子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図 1-2-1 言葉スキル

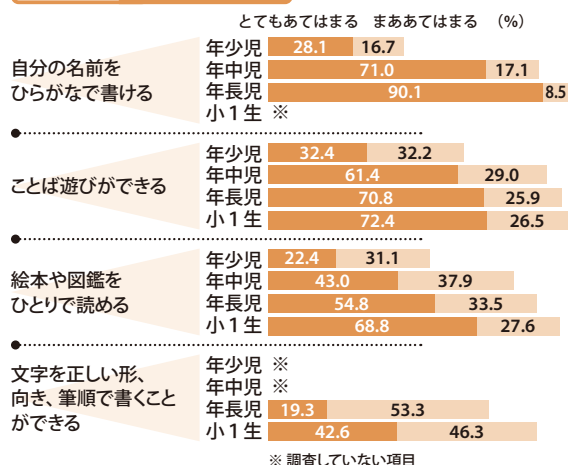


図 1-2-2 数

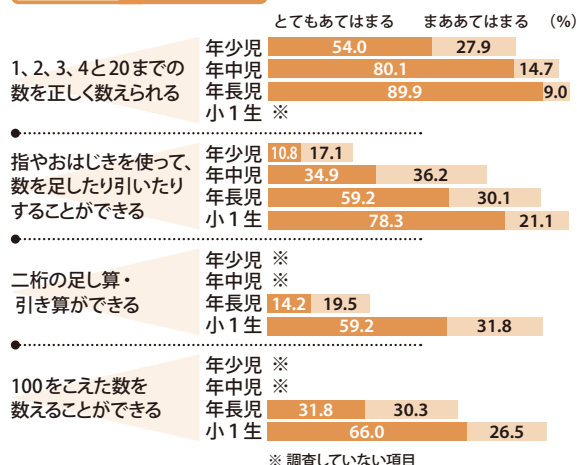


図 1-2-3 論理性

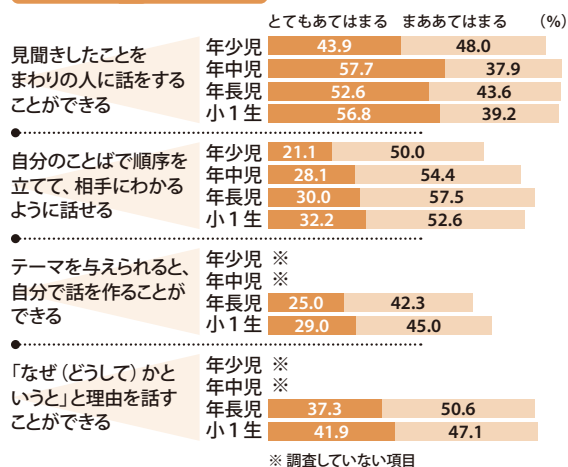


図 1-2-4 分類する力

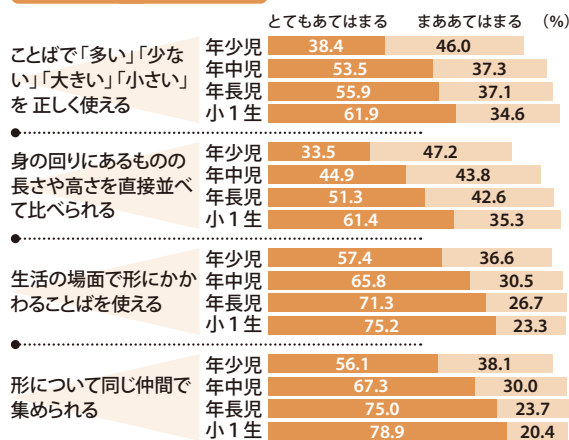
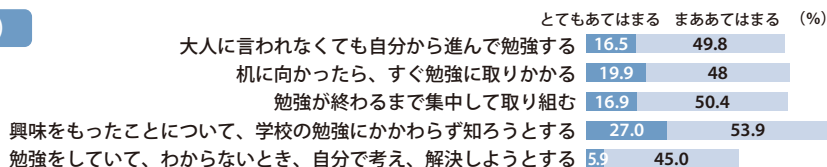


図 1-2-5 学習態度(小学1年)



解説

- 「言葉スキル」「数」は、年少児から小学1年にかけて、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が高くなり、小学1年ではほぼすべての項目が8割を超えている（図1-2-1～2）。一方、「論理性」では、「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計の比率が、ゆるやかに高くなる傾向である（図1-2-3）。「分類する力」は、年少児から小学1年まで、「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率は徐々に高まる。例えば「形について同じ仲間が集められる」では「とてもあてはまる」の比率が年少児では56.1%だったが、小学1年では78.9%だった（図1-2-4）。
- 小学1年の《学習態度》では、いずれの項目も「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が半数を超えている（図1-2-5）。

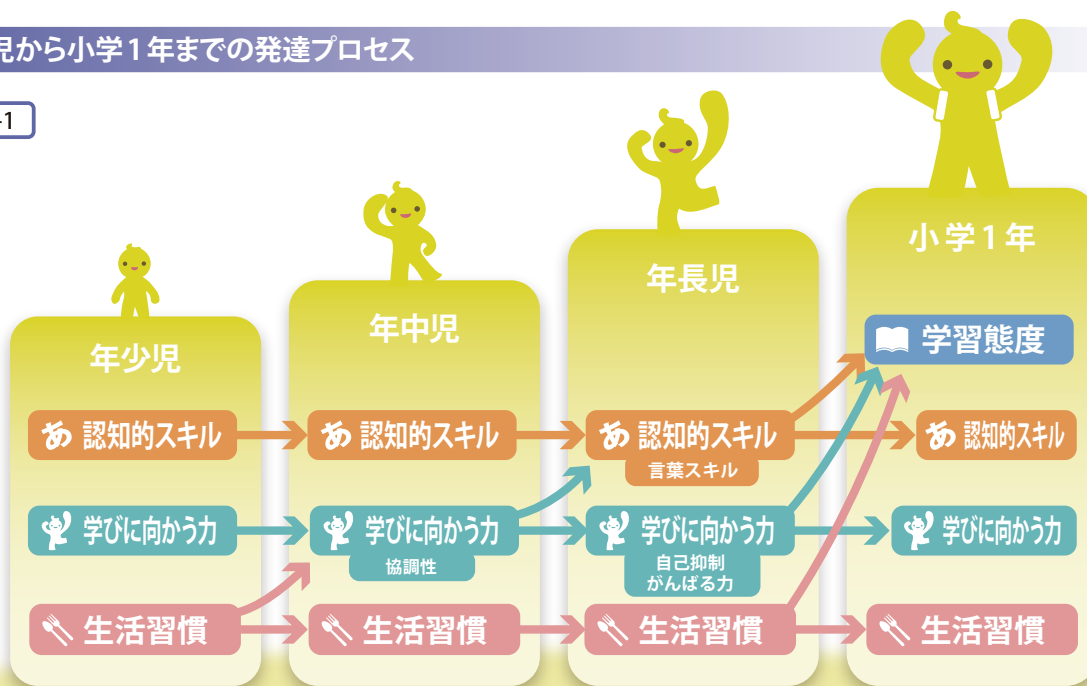
年少児～小学1年の発達のプロセス

《生活習慣》、《学びに向かう力》、《認知的スキル》の発達には順序性がある

年少児から小学1年にかけて、3つの軸《生活習慣（学習態度）》《学びに向かう力》《認知的スキル》は、どのように育つのだろうか。前の学年の力が次の学年にどのように関連しているかを分析した。

年少児から小学1年までの発達プロセス

図 1-3-1

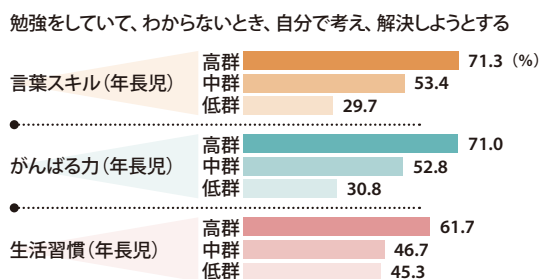


解説

《生活習慣》《学びに向かう力》《認知的スキル》は、それぞれ前の学年の力が次の学年の力に関連している。また、年少児の《生活習慣》が年中児の《学びに向かう力（協調性）》につながり、年中児の《学びに向かう力》が年長児の《認知的スキル（言葉スキル）》に関係する。さらに、年長児の《生活習慣》《学びに向かう力》《認知的スキル》は、小学1年の《学習態度》を支える関係がみられた。年少児から小学1年にかけての子どもの育ちは、《生活習慣》が土台となり、《学びに向かう力》と《認知的スキル》が関連し合い成長していくことが示唆された。

年長児の発達と小学1年の《学習態度》

図 1-3-2 子どもの学習態度（小学1年）



※「とてもあてはまる」「まああてはまる」の合計

※「言葉スキル」6項目、「がんばる力」4項目、「生活習慣」7項目について、「とてもあてはまる」4点、「まああてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「ぜんぜんあてはまらない」1点として算出。すべて回答した人のみ分析した

解説

図 1-3-2 は、年長児の「言葉スキル」「がんばる力」「生活習慣」の得点を出し、人数がほぼ均等になるようにそれぞれ3群に分け、小学1年の《学習態度》との関連をみたものである。年長児の「言葉スキル」「がんばる力」「生活習慣」の高群のほうが、中・低群よりも、小学1年生の「勉強をしていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする」比率が高い。学びの土台である《生活習慣》や「言葉スキル」「がんばる力」を幼児期に身につけることで、幼児期から小学校での学習への移行をスムーズに行えると考えられる（「自己抑制」も同様）。

年少児～小学1年の保護者のかかわり

保護者による「意欲の尊重」は、年少から小1にかけて
ゆるやかに増加する

年少児から小学1年にかけての保護者のかかわりはどのように変化しているのだろうか。

子どもの意欲を尊重する保護者の態度や子どもの思考を促すかかわりについて、

「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を表した。

Q 日頃、お子様と接している際、あなたは以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

保護者のかかわり

図 1-4-1 意欲の尊重

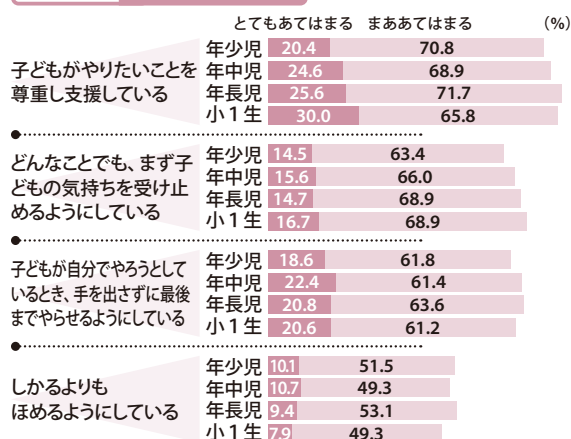
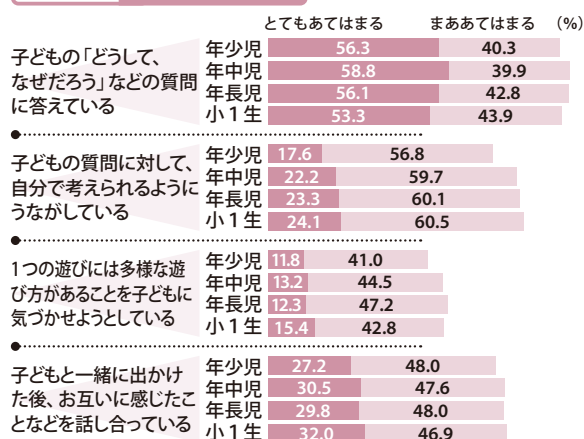


図 1-4-2 思考の促し



解説

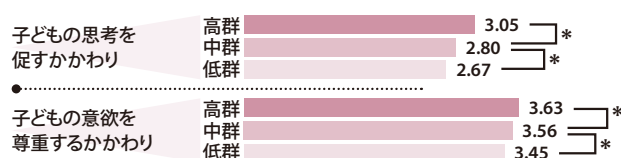
年少児から小学1年にかけての「意欲の尊重」(図1-4-1)では、「子どもがやりたいことを尊重し支援している」「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」について「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率は、年齢とともにゆるやかに高くなる。「思考の促し」(図1-4-2)では、年少児から年中児にかけて比率が高くなる傾向がみられる。「子どもの『どうして、なぜだろう』などの質問に答えている」では、年中児から小学1年にかけて「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が低くなるが、その他の項目については大きな変化はみられない。

保護者のかかわりと子どもの発達

図 1-4-3 子どもの「がんばる力」(年長児)



子どもの「言葉スキル」(年長児)



※「がんばる力」得点は4項目、「言葉スキル」得点は6項目について、「とてもあてはまる」4点～「ぜんぜんあてはまらない」1点としてその平均点を算出した。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみを分析

解説

年長児期の保護者の「意欲の尊重」「思考の促し」の得点を出し、人数がほぼ均等になるように3群に分け、同じ年長児期の子どもの「がんばる力」と「言葉スキル」の得点を見た(図1-4-3)。保護者による「子どもの意欲を尊重する」得点が高い群ほど、子どもの「がんばる力」得点が高かった。同様に、保護者による「子どもの思考を促す」「意欲を尊重する」得点が高い群ほど、子どもの「言葉スキル」得点が高かった。保護者による「意欲の尊重」「思考の促し」といったかかわりが、子どもの「がんばる力」(学びに向かう力)や「言葉スキル」(認知的スキル)を支えていた。

年少児～小学1年の園（小学校）とのかかわり

年少児期から年長児期にかけて、「園に楽しく通っている」子どもは増え、園に対する親の満足度は高くなる

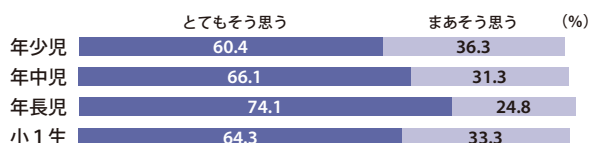
子どもは、多くの時間を過ごす園や小学校に楽しく通っているのだろうか。
園や小学校への保護者の満足度とかかわりと合わせて、年少児から小学1年にかけての変化をみた。

Q あなたからみて、お子様は楽しく幼稚園・保育園／小学校に通っていますか。

Q あなたは、お子様が通っている園／学校の取り組みや指導にどれくらい満足していますか。

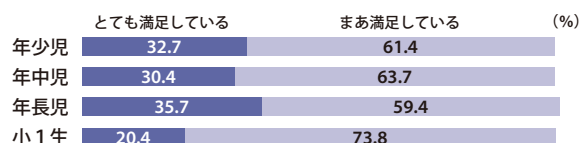
園（小学校）に楽しく通っているか

図 1-5-1



園（小学校）への満足度

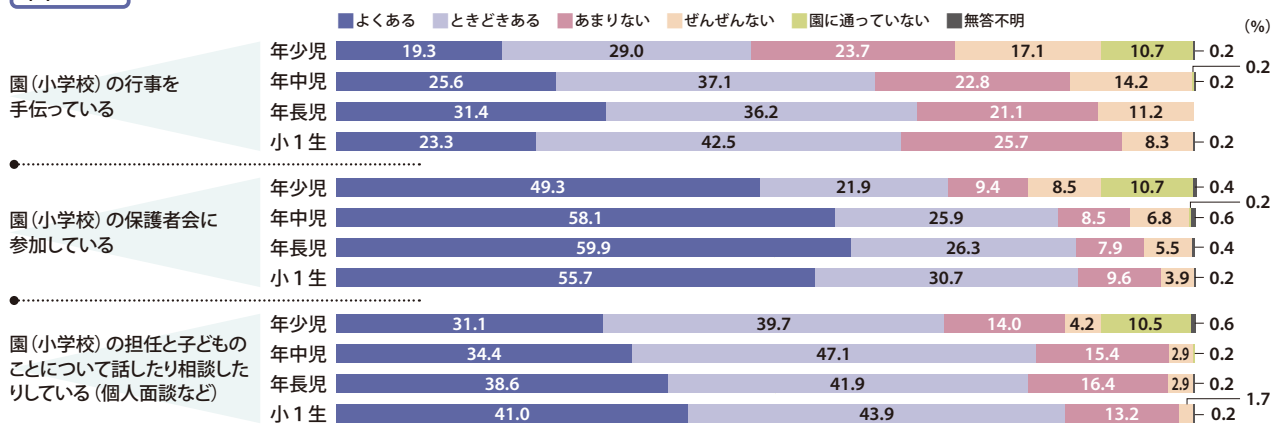
図 1-5-2



Q あなたは現在、次のことについて、どれくらいしていますか。

園（小学校）と保護者のかかわり

図 1-5-3



※「園に通っていない」は年少児～年長児のみにたずねた

解説

子どもが園や小学校に楽しく通っているかについてたずねたところ、どの年齢においても「とてもそう思う」の比率は6割を超えている（図 1-5-1）。年少児から年長児にかけて約14ポイント増加して、年長児から小学1年にかけて約10ポイント減っている。園や小学校への満足度についても、年長児の保護者の満足度がもっとも高くなっている（図 1-5-2）。また園や小学校とのかかわりをたずねたところ、「行事を手伝っている」は5～7割弱（「よくある」＋「ときどきある」）であり、「保護者会に参加している」、「担任と子どものことについて話したり相談したりしている」は7～8割程度であった（図 1-5-3）。

子どもの「意欲の尊重」や「思考の促し」をする保護者のかかわりとは？

～小学生の子どもを持つ保護者へのヒアリング調査より～

アンケート調査より、子どもの「がんばる力」や「言葉スキル」には、保護者の「養育態度」「かかわり」が関係していることがわかった。「養育態度」や「かかわり」とは具体的にどのようなものなのかについて、小学1年から3年の小学生を持つ保護者12名へのヒアリング調査から見ていきたい。子どもに対して、「意欲の尊重」と「思考の促し」をよく行っている保護者の働きかけについてご紹介する。

※ ヒアリング調査は、アンケートの回答者とは異なる保護者に実施した

ケース1

「意欲の尊重」の事例

ヒアリング実施時期：2024年10月～11月

子どもについて：

- 小学1年生男児
- (パズルなど) 終わるまでやり切りたい。集中力があり、やり切ったことの達成感を得たい。
- リーダーの言うことを聞く。約束やルールを守る。

保護者の働きかけ、声かけ：

- 将棋やオセロ風ゲームといったボードゲームが強くなったときに、「強くなったね！そういう作戦どこで覚えたの？」とたずねた。
- 作品の改良を重ねたときに、「すごいね。自分なりに工夫しているんだね。」と声をかけた。

⇒ 結果に対するほめ言葉だけでなく、「**どうやって強くなったのか**」という過程をたずねたり、**子どもが工夫した点をしっかり認める言葉**がけを大切にしている。

ケース2

「思考の促し」の事例

ヒアリング実施時期：2024年10月～11月

子どもについて：

- 小学1年生女児
- 根気強く、あきらめずにやり切る。「がんばったら何でもできる」と考える傾向がある。

保護者の働きかけ、声かけ：

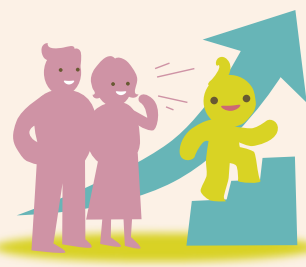
- 目標に届かなかったときに、「**どうしたらいいと思う？**」と家族で話すようにしている。
- 水泳の検定に向けて、**本人に目標を立てさせて、何を練習しないといけないかを子ども自身が考えられるようにしている。**
- 苦手意識がある鉄棒に関して、週末の時間を使い、できるように励ましながら練習に付き添った。

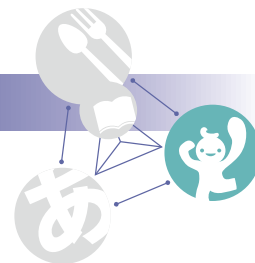
⇒ 子どもが挑戦したいことに対して、**目標を立てられるように話したり、子どもが主体となって目標に向かって具体的に何をすればいいかについても考えられるように促している様子**がうかがえた。

解説

●子どもの思考を促すかかわりについて（調査研究会より）

保護者の子どもへのかかわりというと、言葉のかけ方を考えがちであるが、最初によい聞き手になることが大切である。「子ども自身が考えられるように促す」ということは、「保護者が子どもの言葉を聞いて応答することで、子どもを認める」ことから始まる。それは「言いたいことはこんなことかな」など、子どもの言葉を代弁してあげたり、「それってこんなこと？」と言葉を足してあげたり、「もうちょっと聞かせて」と問いかけたりしながら、子どもがより詳しく自分で考える意欲を持てるようにしてあげることであると思われる。大切なのは子どもと同じ目線で保護者も興味を持ったり、一緒に共感したりしながら、子どもの言葉や行動をふくらませ、子ども自身が考えられるようにしていくことである。





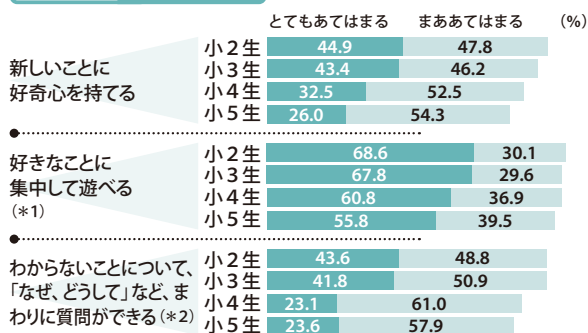
「好奇心」の伸びは減り、 「自己抑制」の伸びは増す

第2章では、年少児から小学5年を通して回答した385名について分析している（保護者回答）。

子どもの《学びに向かう力》は、小学2年から小学5年の4年間にどう変化しただろうか。「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を示した。

Q 現在、お子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

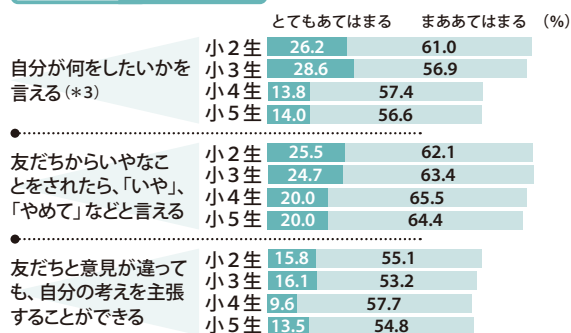
図 2-1-1 好奇心



（※1）小4・5は「好きなことに集中して取り組むことができる」

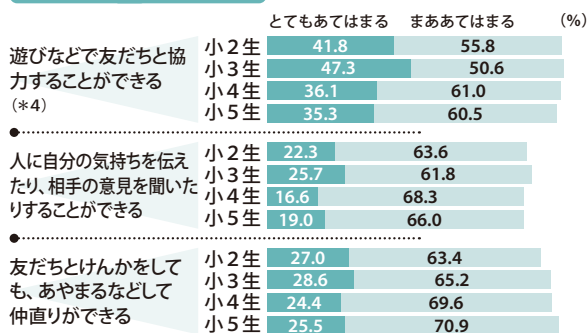
（※2）小4・5は「わからないことについて、考えたり、調べたり、質問したりできる」

図 2-1-2 自己主張



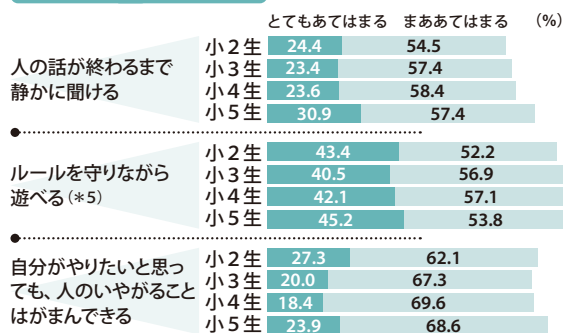
（※3）小4・5は「自分が何をしたいかをまわりの人にはっきり言える」

図 2-1-3 協調性



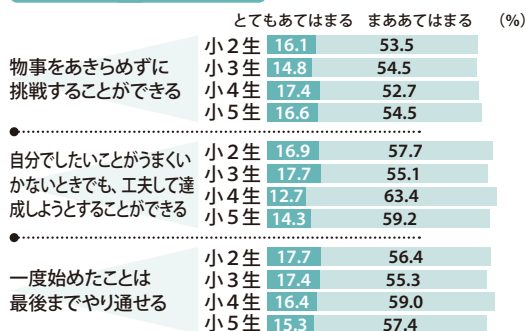
（※4）小4・5は「遊びや勉強・活動などで友だちと協力することができる」

図 2-1-4 自己抑制



（※5）小4・5は「ルールを守りながら遊んだり活動したりすることができる」

図 2-1-5 がんばる力



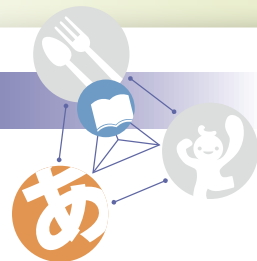
- 「好奇心」は小学3年から小学5年で減少した。例えば、「新しいことに好奇心を持てる」では、「とてもあてはまる」の比率が小学3年では43.4%だったが、小学5年では26.0%だった（図2-1-1）。また、「協調性」は小学3年から小学4年にかけて、「とてもあてはまる」の比率が減少した（図2-1-3）。
- 一方「自己抑制」は小学3年から小学5年にかけて「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が増加した。例えば、「人の話が終わるまで静かに聞ける」では、「とてもあてはまる」の比率が小学3年では23.4%だったが、小学5年では30.9%だった（図2-1-4）。「がんばる力」は変化があまりみられなかった（図2-1-5）。

小学2年～小学5年の《認知的スキル》の発達

「言葉スキル」と「論理性」は、
小学3年から小学4年で減少する

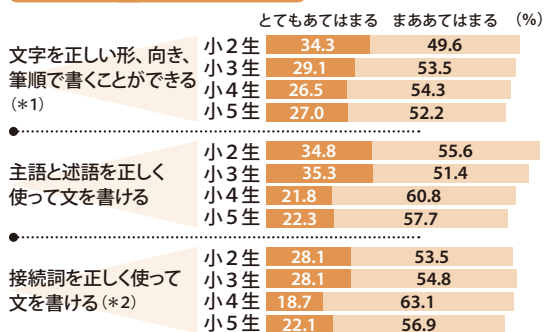
子どもの《認知的スキル》は、小学2年から小学5年の4年間にどう変化しただろうか。

「言葉スキル」と「論理性」について、「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を示した。合わせて、「学習態度」と「教科の自信」の変化も示した。



Q 現在、お子様は以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

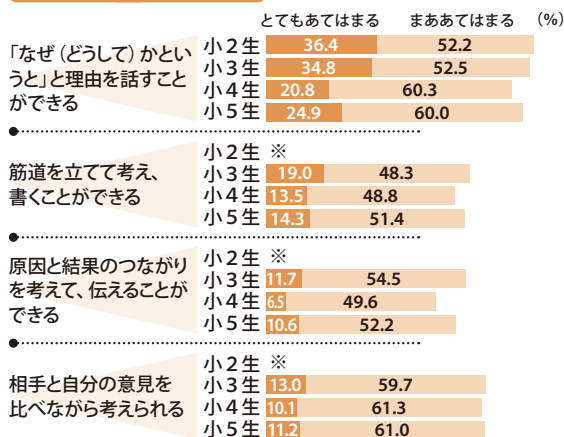
図 2-2-1 言葉スキル



(*1) 小4・5は「漢字を正しい形、向き、筆順で書くことができる」

(*2) 小3・4・5は「接続詞を正しく使って文章を書ける」

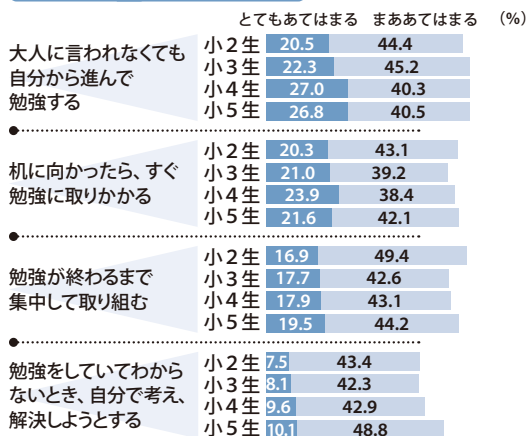
図 2-2-2 論理性



※ 調査していない項目

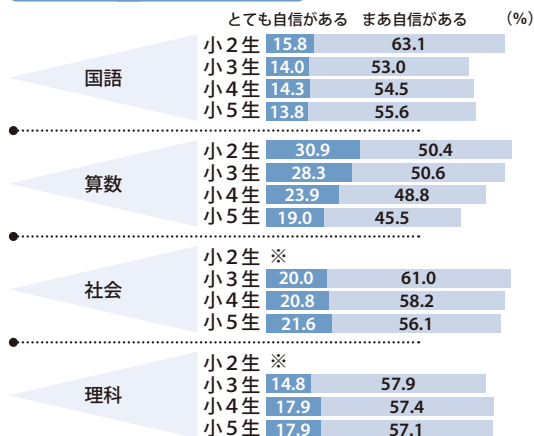
Q お子様は次のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図 2-2-3 学習態度



Q お子様は以下の教科にどれくらい自信を持っていますか。

図 2-2-4 教科の自信



※ 調査していない項目

※「社会」「理科」は小学3年以上でたずねた

解説

- 「言葉スキル」は小学3年から小学4年で「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が減少した。例えば、「主語と述語を正しく使って文を書ける」では、「とてもあてはまる」の比率が小学3年では35.3%だったが、小学4年では21.8%だった(図2-2-1)。同様に、「論理性」も小学3年から小学4年で「とてもあてはまる」「まああてはまる」を合計した比率が減少し、「なぜ(どうして)か」というと理由を話すことができる」では、「とてもあてはまる」が小学3年では34.8%だったが、小学4年では20.8%だった(図2-2-2)。小学低学年から高学年になると、学習内容が知識の習得から物事の関係性を把握し表現するなど、複雑で難解なものになる中で、保護者の子どもに対する評価基準が高くなったことも考えられる。
- 《学習態度》は、小学2年から小学5年まで大きな変化はなく、「とてもあてはまる」と回答したのは2割程度で、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせて6割前後だった。「勉強をされていてわからないとき、自分で考え、解決しようとする」は、「とてもあてはまる」と回答したのは1割程度であり、他の項目と比べてやや低かった(図2-2-3)。
- 《教科の自信》は、国語が小学2年から小学3年にかけて「とても自信がある」「まあ自信がある」を合わせた比率がやや減少し、算数は学年が上がるにつれて減少した(図2-2-4)。

小学低学年から高学年にかけて、 保護者の「意欲の尊重」の比率は増え、「統制的関与」は減る

子どもが発達するとき、保護者のかかわりはどのように変化していくだろうか。

「意欲の尊重」「知的関与」「統制的関与」について、

「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を表した。

Q 日頃、お子様と接している際に、あなたは以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図 2-3-1 意欲の尊重

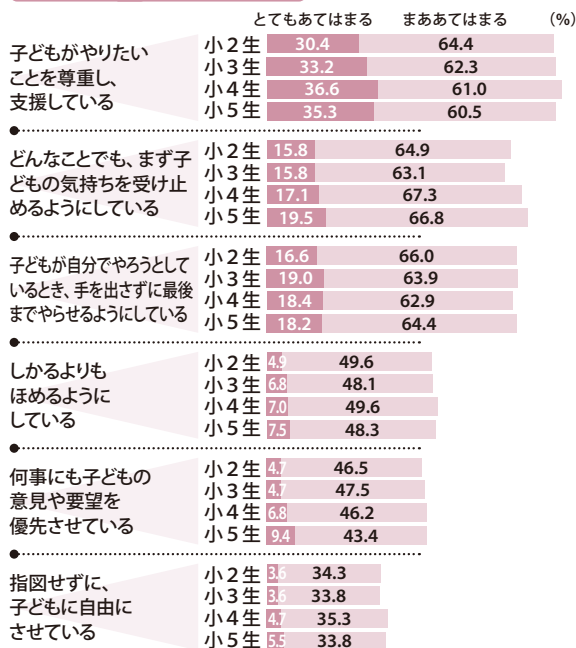
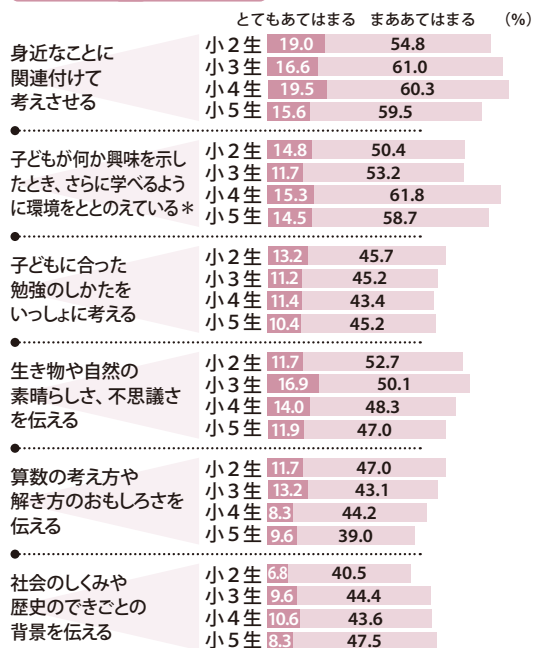
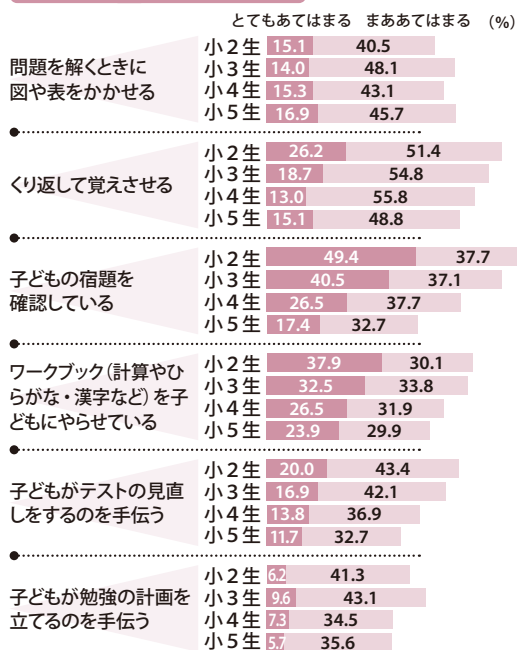


図 2-3-2 知的関与



* 小2・3は「子どもが文字や数に興味を示したとき、さらに学べるように環境をととのえている」

図 2-3-3 統制的関与



解説

● 保護者による「意欲の尊重」の「とてもあてはまる」の比率をみると、いずれの項目についてもやや増える傾向がみられた。次に、「知的関与」と「統制的関与」について、「とてもあてはまる」と「まああてはまる」を合わせた比率をみると、「知的関与」では、「身近なことに関連付けて考えさせる」について、小学2年では73.8%、小学4年では79.8%だった。一方、生き物や自然についてや、算数の考え方などについては減る傾向がみられた。「統制的関与」では、「子どもの宿題を確認している」について、小学2年では87.1%、小学5年では50.1%だった。

● 今回の結果からは、小学2年から小学5年の発達に合わせて、保護者が子どもへのかかわりを徐々に変化させる様子がうかがえる。宿題などへの直接的な関与は減るが、子どもの意欲を尊重したり、身近なことに関連付けて考えさせたりするなどの関与はやや増えている。子どもへの日常的なかかわりの中で、子どもの様子や状況を踏まえたうえで必要な関与をしているといえよう。

小学2年～小学5年の保護者のかかわり ②

保護者の「知的関与」は
子どもの《学びに向かう力》と《認知的スキル》に関連する

小学2年から小学5年にかけて、保護者のかかわりは、子どもにどのように関連しているだろうか。

子どもの《学びに向かう力》と《認知的スキル》の平均値を、同じ時期の保護者の
かかわりの高群・低群別に比較した。

図 2-4-1 子どもの「好奇心」得点
(保護者の「知的関与」2群別)

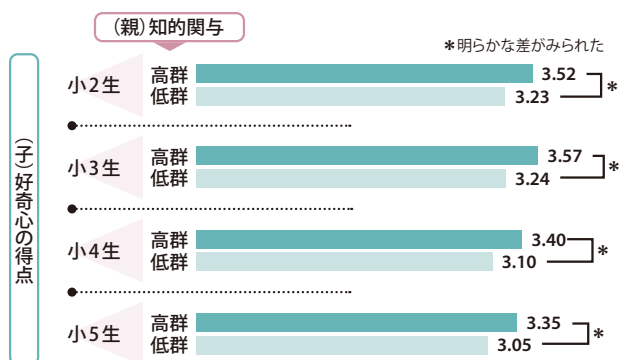


図 2-4-2 子どもの「がんばる力」得点
(保護者の「知的関与」2群別)

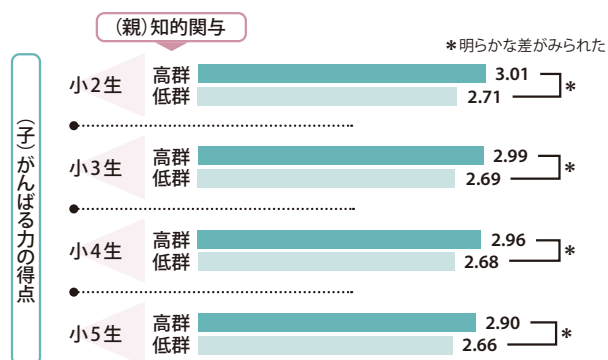


図 2-4-3 子どもの「言葉スキル」得点
(保護者の「知的関与」2群別)

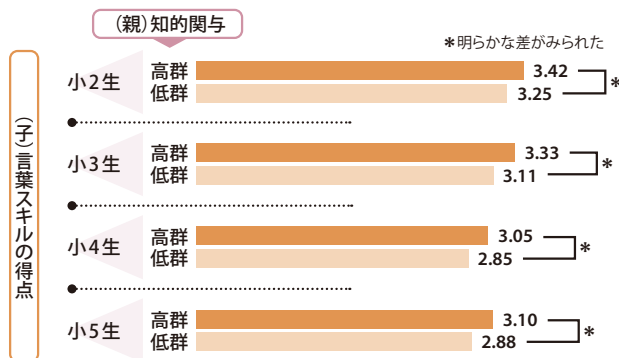
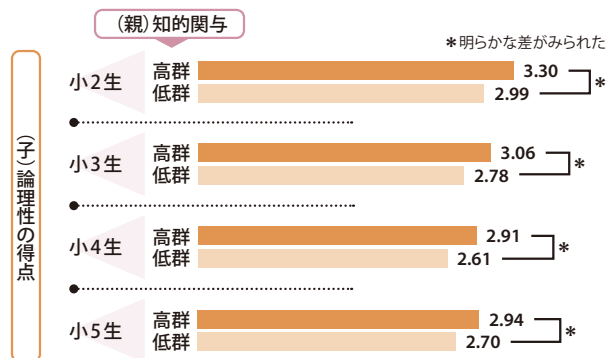


図 2-4-4 子どもの「論理性」得点
(保護者の「知的関与」2群別)

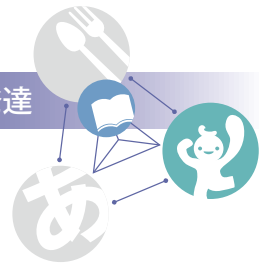


※ 子どもの「好奇心」5項目(小学2年のみ6項目)、「がんばる力」は小学2年・小学3年で4項目、小学4年・小学5年で7項目、「言葉スキル」5項目(小学3年のみ4項目)、「論理性」は小学2年で5項目、小学3年・小学4年で10項目、小学5年で9項目について「とてもあてはまる」を4点、「まああてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「ぜんぜんあてはまらない」1点として、その平均点を算出。なお、最小値は1、最大値は4である。すべて回答した人のみ分析した

※ 保護者の「知的関与」2群は11項目の平均点を算出し、高群と低群に2区分した

解説

- 図2-4-1~2は子どもの《学びに向かう力》、図2-4-3~4は《認知的スキル》について、保護者の「知的関与」の高群と低群ごとに得点の平均値を比べたものである。小学2年から小学5年を通して、保護者の「知的関与」が高い群のほうが、低い群に比べて明かに得点の平均値が高かった。
- 小学2年から小学5年は小学校の低学年から高学年に移行し、思考が広がったり、深まったりして発達していく時期である。保護者が学習内容のおもしろさを伝えたり身近なことに関連付けたりして、子ども自身が学んでいることの楽しさや魅力、生活とのつながりに気づくのを支えることが大切であると示しているといえよう。



「好奇心」は小学6年から中学3年にかけてやや減少するが、全体として大きな変化はない

第3章では、年少児から中学3年を通して回答した291名について分析している（保護者回答）。

子どもの《学びに向かう力》と《生活習慣》は、小学6年から中学3年の間にどう変化しただろうか。

《学びに向かう力》である「好奇心」「自己主張」「協調性」「自己抑制」「がんばる力」と《学習態度》について、

「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率の推移を示した。

Q 現在、お子様は生活の中で、以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図 3-1-1 好奇心

	とてもあてはまる	まああてはまる	(%)
工夫して活動したり遊んだりできる	小6生 26.6	58.3	
	中1生 21.9	60.1	
	中3生 18.7	62.9	
新しいことに好奇心を持てる	小6生 28.8	54.0	
	中1生 24.1	57.2	
	中3生 16.5	59.4	
わからないことについて、考えたり、調べたり、質問したりできる	小6生 23.7	57.9	
	中1生 19.4	62.6	
	中3生 19.8	61.9	

図 3-1-2 自己主張

	とてもあてはまる	まああてはまる	(%)
友だちからいやなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える	小6生 18.7	62.6	
	中1生 14.0	68.3	
	中3生 14.4	68.7	
自分が何をしたいかをまわりの人にはっきり言える	小6生 14.0	55.8	
	中1生 9.7	57.2	
	中3生 13.7	56.5	
ほしいもの、してほしいことを大人に頼める	小6生 25.2	61.9	
	中1生 21.6	63.3	
	中3生 27.3	60.1	

図 3-1-3 協調性

	とてもあてはまる	まああてはまる	(%)
遊びや勉強・活動などで友だちと協力することができる	小6生 37.4	58.6	
	中1生 28.4	64.4	
	中3生 34.9	59.0	
人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる	小6生 20.9	66.5	
	中1生 17.6	66.9	
	中3生 19.4	62.9	
友だちとけんかをして、あやまるなどして仲直りができる	小6生 30.2	63.3	
	中1生 24.5	68.7	
	中3生 18.7	77.0	

図 3-1-4 自己抑制

	とてもあてはまる	まああてはまる	(%)
自分がやりたいと思っても、人の嫌がることはがまんできる	小6生 22.7	69.4	
	中1生 21.9	72.7	
	中3生 26.3	69.8	
ルールを守りながら遊んだり活動したりすることができる	小6生 45.3	51.8	
	中1生 44.6	53.6	
	中3生 44.6	53.6	
夢中になっていることで、時間がくれば、次のことに移ることができる	小6生 16.5	52.5	
	中1生 14.0	55.4	
	中3生 16.2	56.1	

図 3-1-5 がんばる力

	とてもあてはまる	まああてはまる	(%)
自分でしたいことがうまくいかなかったときでも、工夫して達成しようとする事ができる	小6生 14.4	60.1	
	中1生 12.9	62.9	
	中3生 11.5	65.1	
物事をあきらめずに、挑戦することができる	小6生 17.3	59.0	
	中1生 13.7	58.3	
	中3生 15.5	58.3	
どんなことに対しても、自信を持って取り組むことができる	小6生 7.6	54.3	
	中1生 8.3	47.8	
	中3生 8.3	49.6	

図 3-1-6 学習態度

	とてもあてはまる	まああてはまる	(%)
机に向かったら、すぐ勉強にとりかかる	小6生 20.5	45.3	
	中1生 12.9	42.8	
	中3生 10.1	44.6	
勉強が終わるまで集中して取り組む	小6生 19.8	46.8	
	中1生 11.5	50.4	
	中3生 12.2	43.2	
勉強をしていて、わからないとき、自分で考え、解決しようとする	小6生 14.4	49.6	
	中1生 11.5	51.8	
	中3生 11.9	54.7	

解説

「とてもあてはまる」の比率をみると、「好奇心」はいずれの項目も小学6年から中学3年にかけて減少する傾向がみられた（図3-1-1）。「自己主張」は小学6年から中学1年にかけて減少するものの、中学3年になると増加する（図3-1-2）。「協調性」の「遊びや勉強・活動などで友だちと協力することができる」も同様の傾向であった（図3-1-3）。《学習態度》は、小学6年から中学1年にかけて減少する傾向が見られた（図3-1-6）。

学ぶ動機は「自分のためになるから」、 「希望する高校や大学に進みたいから」



本調査では、小学4年以降、子どもへの調査も行っている。
中学生は、学習についてどのような考えや気持ちを持っているだろうか。
学習する理由についてたずねた。



Q 以下の項目は、あなたが学習する理由にどれくらいあてはまりますか。

図 3-2-1 学習動機 (子ども回答)



※ 西村・河村・櫻井 (2011) 「自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス」より項目を引用
※ 中学1年・3年でどちらも回答した子ども163名を分析

解説

学習動機について、「とてもあてはまる」の比率をみると、「自分のためになるから」「自分の希望する高校や大学に進みたいから」「将来の成功につながるから」「勉強するということは大切なことだから」が多く、学びに自分にとっての価値や重要性を見だし、積極的に取り組む動機が3割〜5割弱となっている。またこれらの項目は中学1年よりも中学3年のほうが高くなっており、学習への意識の高まりがみられる。一方で、周囲からの働きかけによって学習に取り組む学習動機である「まわりの人から、やりなさいといわれるから」「成績が下がると怒られるから」や、興味や楽しさに基づいて学習に自発的に取り組む「新しい解き方や、やり方を見つけることがおもしろいから」といった項目は、中学1年、3年ともに約2割(とてもあてはまる)であった。

子どもの気持ちを受け止めたり、自由にさせたりするかかわりが増え、学習への直接的な関与は減少する

小学6年から中学3年にかけて、子どもに対する保護者のかかわりはどのように変化するだろうか。
子どもの気持ちを受け止め、やりたいことを支援する「意欲の尊重」、子どもに授業の復習をさせたり、たくさん問題を解かせたりする「統制的関与」、子どもが学習内容の理解を深められるように説明したり、自分なりに考えさせたりする「知的関与」に注目してみた。

Q 日頃、お子さまと接している際、あなたは以下のことについて、どれくらいあてはまりますか。

図 3-3-1 意欲の尊重

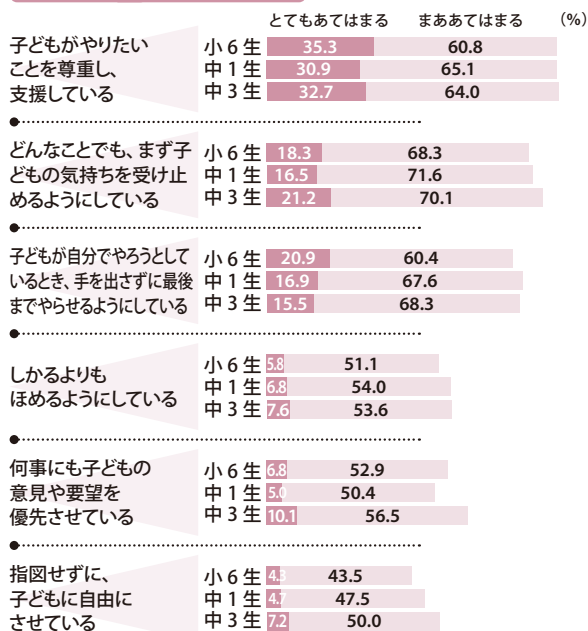


図 3-3-2 知的関与

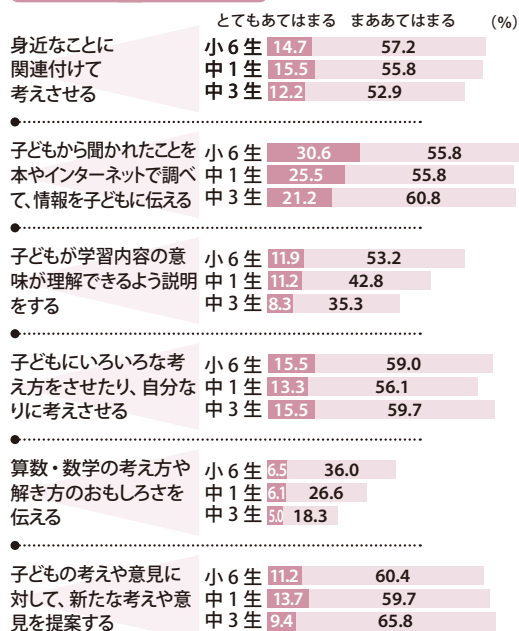
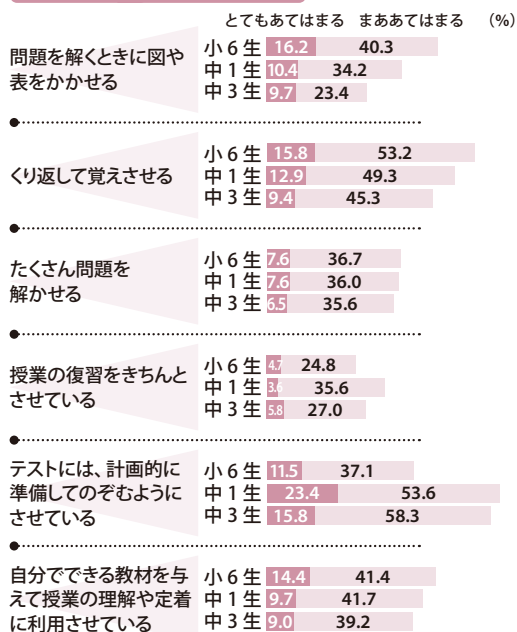


図 3-3-3 統制的関与



解説

● 保護者による子どもの「意欲の尊重」については、「どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている」「指図せずに、子どもに自由にさせている」への回答が小学6年から中学3年にかけてやや増えている(図3-3-1)。幼児期から多くの保護者が子どもの意欲を尊重していたが、子どもが中学生に成長しても、その傾向は続いているようである。

● 学習について、「統制的関与」の「問題を解くときに図や表をかかせる」「くり返して覚えさせる」、「知的関与」の「算数・数学の考え方や解き方のおもしろさを伝える」「子どもが学習内容の意味が理解できるように説明する」などは、学年が上がるとともに保護者のかかわりが減っている。一方で、「統制的関与」の「テストには、計画的に準備してのぞむようにさせている」、「知的関与」の「子どもの考えや意見に対して、新たな考えや意見を提案する」は中学生において増加している(図3-3-2~3)。子どもの成長とともに、直接的な手助けから、子ども自身の計画を尊重したり、必要に応じて保護者から助言や提案をしたりするかかわり方に親子の関係性が変化していることがうかがえる。

中学1年までに身に付けておいたほうがよかったこと

時間の使い方や勉強の目標・計画を立てることが
上位に上がっている

中学1年の2、3月の時点で、保護者と子どもの両方に、
「中学校に入学するまでに身に付けておいたほうがよかったと思うこと」を
16項目のうちから5つ選んでもらった（子どもは「その他」を加えた17項目）。

Q (対象の子どもが) 中学に入学するまでに身に付けておいたほうがよかったことは何ですか(5つまで)

図3-4-1 中学までに身に付けておいたほうがよかったと思うこと(上位5つまで)

保護者			(%)
★①	自分で時間の使い方を考えて調整できること	55.9	
★②	目標や計画を立てて勉強すること	54.9	
★③	自分で間違えたところを確認し、復習すること	43.2	
④	困難なことがあっても、発想を転換して考えること	39.9	
⑤	勉強することは楽しいという気持ちを持つこと	33.3	
★	勉強のやり方をわかっていること	31.5	
	物事をあきらめずに、挑戦できること	30.5	
	周囲に自分の意見や考えを伝えられること	29.1	
	身のまわりだけでなく、社会の動きに関心をもつこと	28.2	
★	友人と良好な関係を築けること	27.2	
	やるべきことや周囲のことを考えて、 自分の気持ちを整理できること	22.1	
	新しいアイデアや発想を生み出せること	22.1	
	身だしなみを整えること	21.1	
	小学校範囲の文章読解、算数の考え方や 解き方を習得しておくこと	19.7	
	小学校範囲の漢字、計算を習得しておくこと	16.9	
	小学校範囲の理科や社会の内容や考え方を 習得しておくこと	8.5	
子ども			(%)
★①	目標や計画を立てて勉強すること	55.9	
★②	自分で時間の使い方を考えて調整できること	49.8	
★③	自分で間違えたところを確認し、復習すること	45.1	
④	勉強のやり方をわかっていること	35.7	
⑤	友人と良好な関係を築けること	32.9	
	身だしなみを整えること	26.3	
	物事をあきらめずに、挑戦できること	25.4	
	小学校範囲の文章読解、算数の考え方や解き方を 習得しておくこと	22.1	
★	勉強することは楽しいという気持ちを持つこと	21.6	
	周囲に自分の意見や考えを伝えられること	19.7	
	新しいアイデアや発想を生み出せること	17.8	
	小学校範囲の漢字、計算を習得しておくこと	16.9	
	やるべきことや周囲のことを考えて、 自分の気持ちを整理できること	16.9	
★	困難なことがあっても、発想を転換して考えること	14.6	
	小学校範囲の理科や社会の内容や考え方を 習得しておくこと	14.6	
	身のまわりだけでなく、社会の動きに関心をもつこと	11.3	
	その他	4.7	

※ ★は他方の①～⑤位に入っている項目

※ 親子とも回答のあった213名を分析

解説

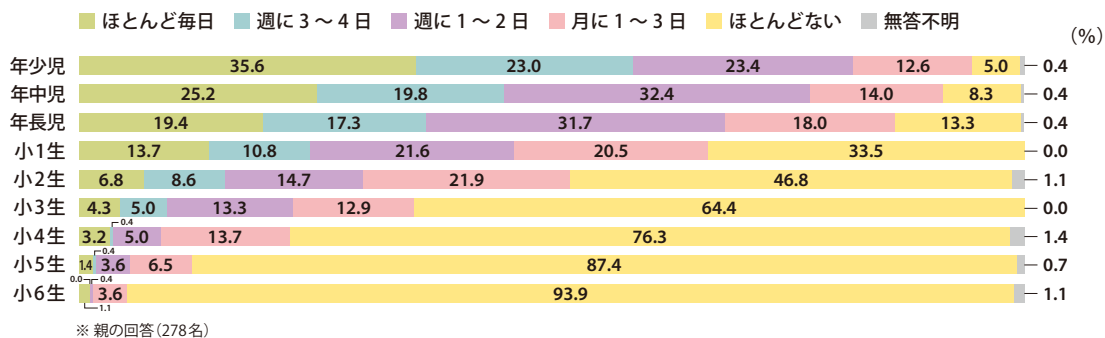
- 親子ともに回答の多い項目は、「自分で時間の使い方を考えて調整できること」「目標や計画を立てて勉強すること」「自分で間違えたところを確認し、復習すること」であった。親子ともに、時間の使い方や目標・計画を立てて勉強すること、間違えたところの復習の重要性を感じていることがうかがわれる。
- また、保護者の回答では「困難なことがあっても、発想を転換して考えること」「勉強することは楽しいという気持ちを持つこと」が5位以内に入り、中学校生活を送る上で、困難さへの対応や勉強に対する気持ちの持ち方などを重視していることがうかがわれる。
- 子どもの回答では、「勉強のやり方をわかっていること」「友人と良好な関係を築けること」が5位以内に入った。友人と関係を築く力は、中学校生活を送る上で身に付けておくべきことであると捉えている。

絵本や本の読み聞かせやひとりで読む頻度は年齢が上がるとともに減少する

第4章では、年少児から中学3年までの親子の回答を分析している（回答数は各グラフに示している）。子どもに絵本や本の読み聞かせをする頻度やひとりで読む頻度は、年齢が上がるとともに、どのように変化していくのだろうか。年少児から中学3年にかけての変化をみた。

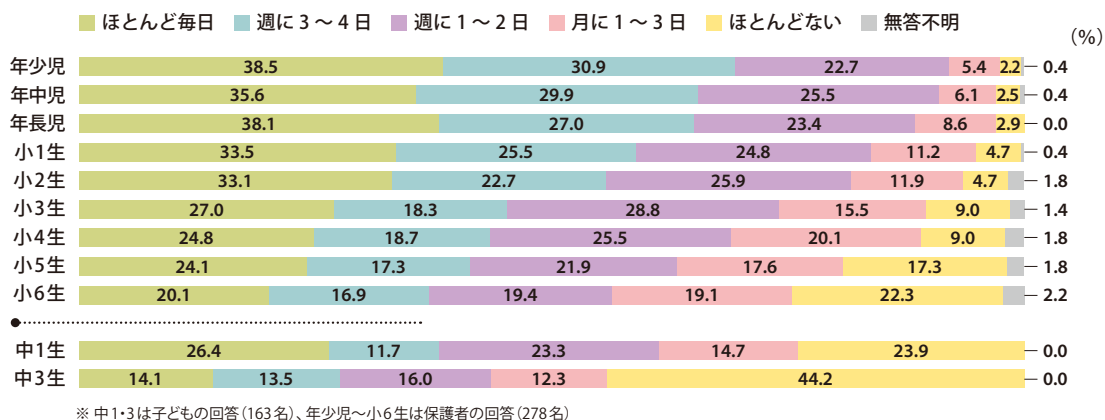
Q あなたは日頃、どのくらいの頻度でお子様に絵本や本の読み聞かせをしていますか。

図 4-1-1 読み聞かせの頻度



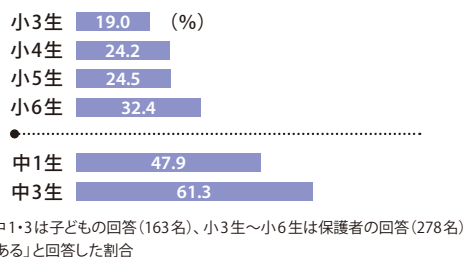
Q お子様がひとりで絵本や本を読む(見る)ことはどれくらいありますか。

図 4-1-2 1週間に子どもがひとりで絵本や本を読む頻度



Q お子様はタブレット端末・スマートフォンでデジタル書籍・絵本を読んだことはありますか。

図 4-1-3 デジタル書籍・絵本を読んだ経験の有無



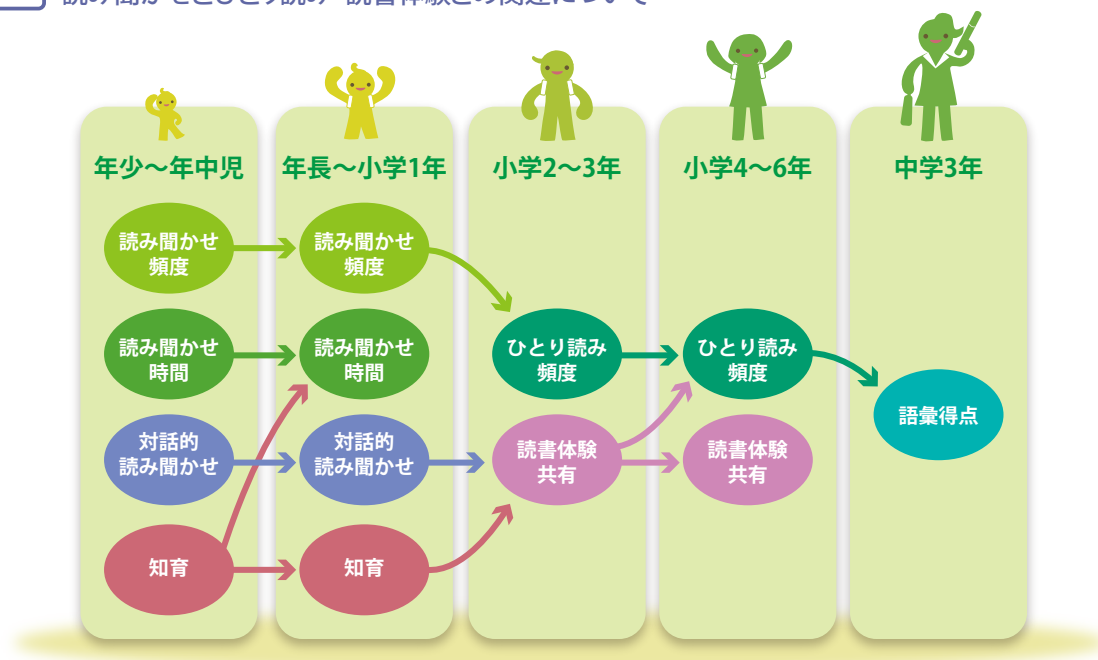
解説

保護者が読み聞かせをする頻度は、子どもの年齢が上がると減っている(図4-1-1)。年少児では週に3～4日以上が約6割弱であるが、小学1年では2割半になり、小学3年で1割弱となる。子どもが1週間にひとりで絵本や本を読む(見る)頻度については、「ほとんど毎日」の割合は年少児38.5%でもっとも多かった。年少児から年長児にかけては4割弱であるが、年長児から小学6年にかけて18ポイント減っている。中学3年では「ほとんどない」が4割強を占めている(図4-1-2)。一方、デジタル書籍・絵本の読書経験は年齢が上がるとともに増加している。小学3年では19.0%、中学3年では61.3%であった(図4-1-3)。

※ 中学1年の時期は、GIGAスクール構想による一人一台端末が広がった時期である

幼児期の絵本や本の読み聞かせが、 小学生でのひとり読みや親子での読書体験の共有につながり、 中学生での語彙力を支えている

図 4-2-1 読み聞かせとひとり読み・読書体験との関連について



分析で用いた項目

読み聞かせ頻度	「ほとんど毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」「月に1～3日以下」「ほとんどない」
読み聞かせ時間	先週1週間（調査回答時点）の中での1日の平均時間
ひとり読み頻度	「ほとんど毎日」「週に3～4日」「週に1～2日」「月に1～3日以下」「ほとんどない」
読書体験共有	子どもと絵本や本の内容について、感想を話し合ったり、実際の出来事と関連付けて話し合うといった親子のやりとり
幼児期の対話的読み聞かせ	絵本の読み聞かせにおいて、説明を加えたり、子どもに質問をしたり、子どもの質問に答えたりしながら読むといった親のかかわり
知育	子どもと一緒に数を数えたり、ワークブック（計算やひらがな・漢字など）を子どもにやらせているといった親のかかわり
語彙得点	中学3年時に実施した語彙理解力に関するテストの得点 ※項目反応理論に基づいて尺度化したもの

※ 図中の観測変数および潜在変数は、子どもの月齢、性別、母親の学歴による影響を統制している

解説

この分析では、幼児期から小学1年までの家庭での読み聞かせや知育的なかかわりが、小学2年以降のひとり読みや読書体験にどのように関連するのか、またそれらが中学3年の「語彙得点」に与える影響について検証した。幼児期から小学1年の家庭での読み聞かせは、小学低学年での子どものひとり読み頻度の高さや、親子での読書体験共有の豊かさに関連し、さらにそれらが、小学高学年でのひとり読みを支えていることが明らかとなった。また、読み聞かせは、1回あたりの時間の長さよりも、頻度の高さの方が重要であるようだ。

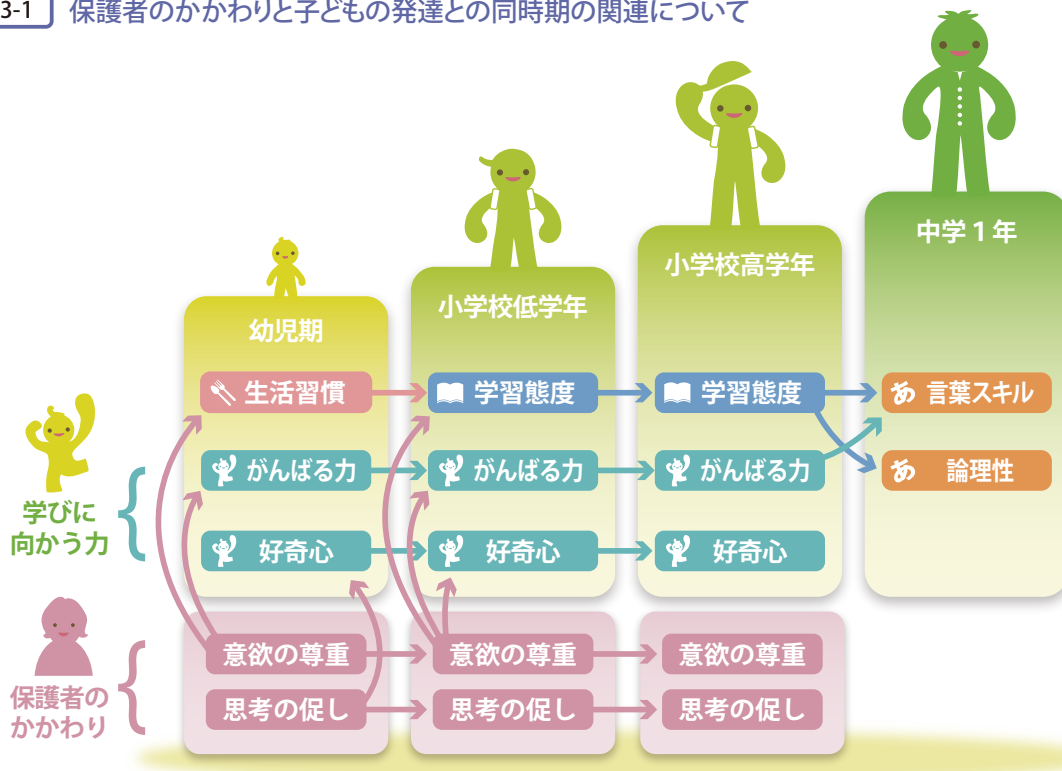
絵本の読み聞かせを通じた親子のコミュニケーションや、家庭での文字に関する知的教育は、就学後においても、本を通した親子のやりとりの豊かさを支えているとともに、小学低学年でのこうしたやりとりが、小学高学年での子どものひとり読みの頻度の高さに影響していた。さらに、それが中学3年時での語彙力の高さにも影響を及ぼしていた。

これらのことから、幼児期に親子で絵本や本に触れる経験は、児童期の子どもの読書習慣の形成を支えている可能性が示唆された。また、こうした児童期での読書経験の多さが、思春期以降の子どもの語彙力の高さにも影響していることが確認された。

保護者による子どもの「意欲の尊重」や「思考を促す」かかわりは 幼児期～小学低学年の子どもの発達を支えている

ここでは、年少児から中学1年まで回答した223名について分析している（親子回答、子どもは中学1年時のみ回答）。

図 4-3-1 保護者のかかわりと子どもの発達との同時期の関連について



分析で用いた項目

	子ども	生活習慣・学習態度 学びに向かう力：小学生以降の発達に影響があるといわれる「好奇心」「がんばる力」 認知的スキル：「言葉スキル」「論理性」 ※中学1年時の認知的スキルのみ、子ども自身の回答
	保護者	養育態度：「意欲の尊重」 かかわり：「思考の促し」

※ 中学1年調査での子どもの回答数に合わせて、分析データは223名としている

※ 図中の観測変数および潜在変数は、子どもの月齢、性別、母親の学歴による影響を統制している

解説

この分析では、幼児期から小学高学年にかけての子どもの《生活習慣・学習態度》「好奇心」「がんばる力」がどのように育っていくか、また、それらと中学1年の「言葉スキル」「論理性」との関連性について検証した。合わせて、幼児期、小学低学年、高学年の各時期における保護者の養育態度や働きかけが、子どもの発達をどのように支えているかについても分析している。

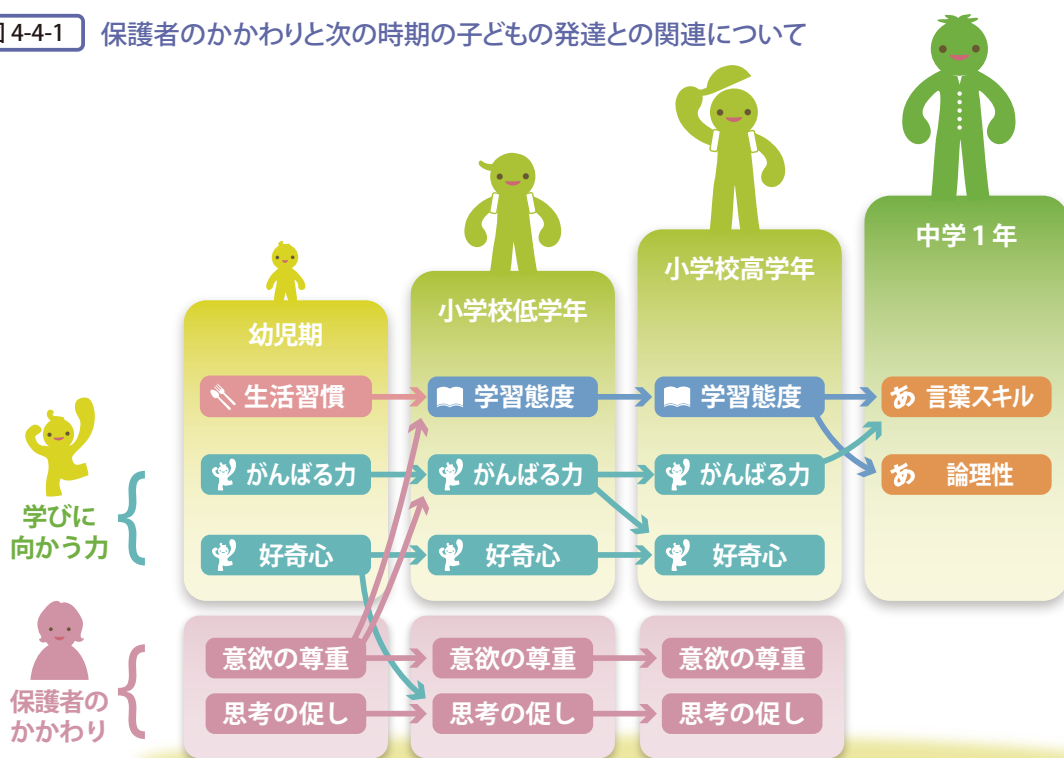
その結果、幼児期と小学低学年では、保護者が「子どもの意欲を尊重したり（意欲の尊重）」、「自ら考えるように思考を促したり（思考の促し）」することが、子どもの《生活習慣・学習態度》や「好奇心」「がんばる力」といった《学びに向かう力》を支えていた。一方、小学高学年での保護者のこうしたかかわりは、子どもの《学習態度》や《学びに向かう力》に関連していなかった。

このことから、幼児期から小学低学年における、保護者の養育態度や働きかけが、子どもの“今”と“その後”の発達を支えていると言えるだろう。

幼児期の意欲を尊重する保護者の態度が 小学低学年での《学習態度》や「がんばる力」の 成長につながる

ここでは、年少児から中学1年まで回答した223名について分析している（親子回答、子どもは中学1年時のみ回答）。

図 4-4-1 保護者のかかわりと次の時期の子どもの発達との関連について



分析で用いた項目



子ども

生活習慣・学習態度

学びに向かう力：小学生以降の発達に影響があるといわれる「好奇心」「がんばる力」

認知的スキル：「言葉スキル」「論理性」 ※中学1年時の認知的スキルのみ、子ども自身の回答

保護者

養育態度：「意欲の尊重」

かかわり：「思考の促し」

※ 中学1年調査での子どもの回答数に合わせて、分析データは223名としている

※ 図中の観測変数および潜在変数は、子どもの月齢、性別、母親の学歴による影響を統制している

解説

この分析では、幼児期の親のかかわりが、小学低学年の時期の子どもの発達に関連しているか、同様に、小学低学年の時期の保護者のかかわりが小学高学年の時期の子どもの発達に、小学高学年の時期の保護者のかかわりが中学1年時の子どもの発達に関連しているかを分析した。またそれぞれの時期における子どものスキルなどが保護者の養育態度にも関連しているかを検証した。

その結果、幼児期に、保護者が子どもの意欲を尊重するかかわりが、小学低学年での子どもの「学習への前向きな態度《学習態度》」や、「がんばる力」の成長に結びついていた。小学低学年の《学習態度》や「がんばる力」は、小学高学年の時期での《学習態度》や「がんばる力」「好奇心」にも関連し、さらには、中学1年時での「言葉スキル」と「論理性」の発達へと関連していた。

このことから、幼児期における保護者のかかわりは、小学低学年という少し先の子どもの《学習態度》や「がんばる力」を伸ばしており、幼児期の親子のかかわりが、その先の小学低学年の子どもの成長に関連することが示唆された。

また、幼児期において、「好奇心」の強い子どもに対しては、小学低学年での「子どもに自ら考えることを促す（思考の促し）」かかわりが多くなる傾向がみられた（図略）。このように保護者のかかわりが子どもの発達に関連するだけでなく、子どものスキルが保護者のポジティブなかかわりを引き出す面もあることが確認された。

調査から読み取れること

無藤 隆

白梅学園大学名誉教授



本調査は2012年3月つまり子どもが3歳児のときから開始し、2022年8月に中学3年になるまで毎年1回の調査を行ってきた。対象は保護者(母親)である。途中、幼児から小学生になる際にサンプルが半減し、その後も漸減しているので、分析したサンプルが当初の全体のサンプルと基本的な変数では違いがないことを確認している。また小学4年以降は子ども自身を対象とした調査を加えたが、その前は保護者から見たものをたずねている。小学4年以降も保護者への質問は継続している。質問内容はその年齢に合わせて内容的な同一性を確保しつつ変更を加えてきた。その結果は年齢的な変化と共に時代的な変化が重なっているに違いない。特に2020年・2021年は新型コロナウイルス感染症の拡大が見られた時期であり、休校等もあり、注意が必要であろう。

分析は理論的なモデルを想定して行った。それは、親子の相互作用の影響関係は同時期で生じること、そして次の時期への影響関係は子どもの安定した特性(能力やスキルや習慣)を通して起こること、時期を飛び越えての影響関係は隣り合った時期での影響の継続として起こること、などである。また分析としては、同様の変数の間の隣接時期の相関は極めて高いため、それを統計的に除きまた主要な変数の相互関係を統制して、パス解析等で行った。また、性別、月齢、母親の学歴を全体として統制した。

主な結果として、母親の養育態度や働きかけ(意欲の尊重と思考の促し)が子どもの生活習慣・学習態度や好奇心、がんばる力を支えている。なお、小学校高学年ではそういう関連は見られなく

なる。さらに、幼児期の保護者の意欲を尊重するかかわりが小学校低学年の子どもの学習態度やがんばる力に結びついていた。また、小学校高学年での成長にも影響し、中学1年での言葉のスキルと論理性につながっていた。

ここから、第一に保護者のかかわり(もとより子どもからの影響もあるとしても)、とりわけ意欲と思考への誘導が子どもの学ぶ力への育成に影響していくようである。特にそれは幼児期に見られることである。第二に小学校の学習や知的発達のある部分に対して幼児期の子どもの知的な成長が影響を与えるようである。特に、子どもの興味・関心を支え伸ばす保護者のかかわりが小学校低学年での学びに向かう力に影響し、それがさらに高学年につながり、とくにそこでの学習態度とがんばる力が中学1年生の知的な力へとつながることが示唆されるのである。

秋田 喜代美

学習院大学教授・東京大学名誉教授



本調査は学術的にみると他研究にはない、3点の特徴がある。第1は3歳から中学3年まで同一の子どもを毎年追った調査であること、第2はその際に子どもの発達として認知的スキルや生活習慣だけではなく、学びに向かう力という非認知スキル等とも言われるこれからの社会に大事とされる資質を含む調査であること、第3に国際的に数多くの縦断調査がなされているが、保護者のかかわりにも焦点を当て毎年継続調査した調査は他国にもないこと、すなわち家庭環境や保護者のかかわりの大切さを示した初の縦断調査である。

今回の報告の中でも私は次の3点に特に着目し

たい。第1の着目点は、幼児期の読み聞かせ頻度が小学校低学年のひとり読みにつながり、さらに高学年以降の言葉スキルや論理性・語彙量につながるという道筋を示す結果である。また大事なのは幼児期の読み聞かせ等には世帯年収は関連しないという事実である。言葉スキルや論理性はトレーニングですぐに身につくものではない。だからこそ、生涯の学び手育成のためにもこの研究知見が示すように、幼児期の読み聞かせや低学年のひとり読み読書を大事にしたい。

次に、年少児から小学1年への育ちにおいて、3歳児期の生活習慣が基盤となり、4歳児期の仲間との協働性のような学びに向かう力にもつながり、さらに自己抑制やがんばる力という学びに向かう力につながり、小学校以降の学習態度等につながるという知見である。「認知的スキル」の教育だけではなく、幼児期に生活習慣や学びに向かう力の3本柱（生活習慣・学びに向かう力・認知的スキル）がバランスよく育つことが、学習態度や思考力育成にもつながる。

そして第3の着目点は、この発達の道筋において、幼児期における保護者の意欲の尊重と思考の促しが大事という知見である。学習への前向きな態度やがんばる力は幼児期から小学校低学年に育つこと、中高学年や中学校になっても学びに向かう力は大きく変化しないことも示された。だからこそ幼児期からが大事である。また小学校高学年や中学3年までの情報があるから、自ら目標や計画を立てることや学習や時間の使い方を考え調整できることを児童期に身につけておくことの大切さが親子両者の声としても挙がってきた。意欲の尊重でも、特定の学習内容の促しや意欲の尊重ではなく、子ども自らが計画や目標を立てたり時間管理ができたりするよう、義務教育段階での家庭での習得が重要と言えるだろう。

荒牧 美佐子

国立教育政策研究所
幼児教育研究センター フェロー



今回は、幼児期から中学3年までのデータを用いて、12年間の子どもの育ちとそれらを支える保護者のかかわりについての検証を行いました。その結果、幼児期の読み聞かせや、子どもの意欲を尊重したり、子どもが自ら考えることを促したりするかかわりは、中学生での言語的なスキルに直接的な影響は及ぼしてはいないものの、小学校低学年での子どもが本を一人で読む頻度や、学びに向かう力を支えていることがわかりました。そして、それらが積み重なる形で、最終的には中学3年時点での言葉スキルや論理性に関与していることが明らかとなりました。つまり、幼児期における保護者のかかわりは、数年先（小学校高学年～中学生）の子どもの言語発達に決定的な影響を及ぼすほどの強さはありませんが、少し先（小学校低学年）の子どもの学習態度や「がんばる力」などの社会情動的スキルの育ちを支える土台となりうるという意味で重要だと言えます。

また、読み聞かせ活動に関する分析結果から、保護者のかかわりは、子どもへの一方向的な働きかけであるよりも、本に触れる楽しさを子どもと一緒に共有するなど、双方向のやりとりであることの方が効果的なようです。こうした伴走型のかかわりが、小学校入学後、子どもが本を読むことを習慣づけ、結果的に言語的なスキルの向上へとつながっていると考えられます。「意欲の尊重」や「思考の促し」といったかかわりも、子どもに寄り添う養育態度と捉えれば、同じことが言えそうです。

ただし、これらは幼児期から小学校低学年あたりまでは効果がありそうですが、高学年での子

もののスキルの発達を支えるには十分とは言えないかもしれません。全体的に子どもへかかわる量そのものが減るとともに、子どもの年齢や発達に応じて、保護者のかかわり方にも変化が生じていることが考えられます。例えば、学力などの認知的なスキルの向上に関しては、単に寄り添うだけでなく、より具体的な学習方略について教示することが関連しているかもしれません。これらのことについても、今後、引き続き分析が必要です。

都村 聞人

神戸学院大学准教授



本調査の特色は、第1に子どもの「学びに向かう力（非認知的スキル・社会情動的スキル）」と「認知的スキル」が年齢とともにどのように変化しているか、そして子どものスキルの発達に保護者のかかわりがどのように影響しているかを明らかにすること、第2に年少児から中学3年生まで同じ調査対象者（保護者・子ども）を追跡的に調査することにより、子どもの発達に影響を与える要因などをより詳細に分析できることにあります。

学びに向かう力（非認知的スキル・社会情動的スキル）」に関して、今回の分析結果（p.18）では子どもの年齢の上昇にともなって低下もしくは停滞しているようにみえる項目もあるかもしれません。しかし、本調査では保護者が子どもに対して行う評価によって「学びに向かう力（非認知的スキル・社会情動的スキル）」を測定しているので、子どもの年齢が高くなるにしたがって、保護者が子どもをみる評価基準が厳しくなっている可能性などを考慮する必要があります。

保護者のかかわりのうち「意欲の尊重」に関し

ては子どもの年齢が上がっても、頻度がほぼ変わらない傾向にあります。p.24～25の分析結果によれば、幼児期の「意欲の尊重」は中学1年時の認知的スキルを下支えしており、保護者から子どもに対する重要なアプローチのひとつといえるでしょう。

また、本調査の対象は子どもが中学1年生の段階で新型コロナウイルス感染症拡大の状況におかれており、それに伴うさまざまな制約や教育方法のやむを得ない変更が、子どもの学びに向かう力の発達や保護者の学習面のかかわりに影響を与えている可能性があります。各種調査の結果と照らし合わせながら、その影響を今後慎重に検討する必要がありますでしょう。

参考資料

西暦 (調査対象の子どもの年齢)	保育・教育の動向 ★は保育・幼児教育関連	デジタル関連	社会一般
2007年(誕生)	学校教育法改正	YouTube 日本版	
2008年(0～1歳児)		Twitter(現X) 日本版	リーマンショック
2009年(1～2歳児)	★幼稚園教育要領・保育所保育指針実施(幼児教育の重要性)		
2010年(2～3歳児)		iPad 発売	
2011年(年少児)	新学習指導要領(小学校)全面実施(授業時間数の増加、小学校で外国語活動の必修化)	LINE	東日本大震災
2012年(年少～年中児)		スマートフォンの世帯保有率が約5割に	
2013年(年中～年長児)		『妖怪ウォッチ』(ゲーム版)	
2014年(小学校入学)		Instagram 日本版	消費税8%
2015年(小学1～2年)			女性活躍推進法成立
2016年(小学2～3年)		・『ポケモン GO』 ・Society 5.0	出生数100万人を下回る
2017年(小学3～4年)	★待機児童数がピークに	・『Nintendo Switch』 ・TikTok 日本版	
2018年(小学4～5年)	★幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領実施 ・道徳の教科化		
2019年(小学5～6年)	★幼児教育・保育の無償化 ・GIGAスクール構想		・働き方改革 ・消費税10% ・SDGs推進への動き
2020年(中学校入学)	・新型コロナウイルス感染症の拡大による休校措置 ・新学習指導要領(小学校)実施(新学習指導要領で主体的・対話的で深い学びが強調される。小学5、6年で英語教科化、小学校でプログラミング教育必修化)		新型コロナウイルス感染症の拡大
2021年(中学1～2年)	・公立小中学校に1人1台端末広がる ・新学習指導要領(中学校)実施		・東京オリンピック ・大学入学共通テストスタート
2022年(中学2～3年)	・新学習指導要領(高校・年次進行)実施		成人年齢が18歳に
2023年(中学校卒業)	こども基本法・こども家庭庁発足		

調査対象の子ども(2007年4月2日～2008年4月1日生まれ)が育った時代環境

本調査対象の子どもたちは、乳幼児期にデジタルサービスが次々と登場しはじめる一方、リーマンショックや東日本大震災で社会や経済が厳しくなる環境を過ごした。小学校では、2011年に実施された新学習指導要領により、授業時間数が増加し、小学5・6年での外国語活動が必修になるなど、子どもたちは“脱ゆとり教育”を目指した学校教育を受けている。社会では、女性活躍推進法や働き方改革、SDGs推進への動きなど、働き方や日常の過ごし方が見直される時期を過ごした。

小学校卒業と中学校入学の時期に、新型コロナウイルス感染症が拡大し、休校措置が執られ、授業や行事の変更があった。中学校は新型コロナウイルス感染症の流行による社会や経済状況の変化の中で、学校生活や放課後の活動に制限を受けながらも、公立小中学校の1人1台端末の普及等により、オンラインによる学びや活動が広がっていく時期を過ごした。

幼児期から 中学3年生の 家庭教育調査 研究会

無藤 隆 (白梅学園大学名誉教授)
秋田 喜代美 (学習院大学教授、東京大学名誉教授)
荒牧 美佐子 (国立教育政策研究所 幼児教育研究センター フェロー)
都村 聞人 (神戸学院大学准教授)
高岡 純子 (ベネッセ教育総合研究所主席研究員)
木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所主席研究員)
岡部 悟志 (ベネッセ教育総合研究所主任研究員)
野崎 友花 (ベネッセ教育総合研究所研究員)
酒井 晶子 (東京個別指導学院)
田村 徳子 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)
真田 美恵子 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)
邵 勤風 (ベネッセ教育総合研究所 研究スタッフ)

※肩書き・所属は、刊行時点のものです

- 本報告書はベネッセ教育総合研究所の ホームページからダウンロードできます
ベネッセ教育総合研究所が実施している各種調査の結果や引用・掲載についても、
こちらからご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所

検 索

<https://benesse.jp/berd/>



ダイジェスト版

幼児期から中学3年生の 家庭教育調査

縦
断
調
査

発行日 ● 2025年3月

発行人 ● 野澤雄樹

編集人 ● 木村治生

発行所 ● (株)ベネッセコーポレーション ベネッセ教育総合研究所

企画・制作 ● ベネッセ教育総合研究所

〒206-8686 東京都多摩市落合1-34

デザイン ● 中村ヒロユキ (Charlie's HOUSE Inc.)